"ミュンヘン"への道

渡欧し、武者修業をしていた選手団が帰ってきた。無事に、たくましくなって……

ルーマニアでの厳しい合宿。その後の試合の強行日程を無事消化して、しかもタスマジャン杯三位という、予期以上の成績をもって帰ってきた。

このタスマジャン三位ということは、手放しで喜べる成績ではないが、我が国のハンドボールに一筋の明るい光明をもたらしたものとして高く評価していいことと思う。

世界のベスト8入り。云うはやさしく行なうには誠に困難な道である。

チェコ、ルーマニア、西ドイツ、ソ連、デンマーク、東ドイツ、ハンガリー、ユーゴー、スウェーデンとすぐに十ケ国近い強い国々の名が思い浮ぶ。いずれをとっても、伝統と強い厳しい練習の上につちかわれたチーム力をもっている国々であり、これらの一つないし二つを破らないことには、ベスト8入りを果すことはできない。

それが今回のタスマジャン杯では、ユーゴーを破り、ハンガリーと分け、結局敗れはしたけれども、ソ連、ルーマニアともまずまずの試合を行なっている。これはチーム力が増加した結果とみられよう。

従来、とても歯がたつ相手ではないと考えられていた諸国と対等に近い試合をしてきたということ、これは非常に大きなプラスであろう。

しかし、これまでのヨーロッパ球界では、日本は大した相手と考えられてはいなかった。だが、この度のタンマジャンの成績によって、ヨーロッパ諸国の日本観は大きく変ってきている筈である。

完全に追う立場にあって、足下に見られていた日本が対等の立場にまできたと知ったならば、日本に対する研究は大いに進むことになろう。ノーマークとマークされていること、これは大きな違いとなる。とくにユーゴーは、明年の世界選手権の予選リーグで顔を合せる当面の相手である。これが今回の敗戦をきっかけにして、日本研究をやらない筈がない。

今回の成績に甘んずることなく、ますます強化につとめないことには、本番で苦い汁を飲むことになろう。やればできるという自信をもつと同時に斯界一丸となっての精進に努めないと、今回の成績は水の泡になって消えてしまうことになろう。（藤本）

時評

いよいよ夏の"全日本シーズン"が幕をあけた。これまでは全日本学生が、その皮切りとなっていたが、今年は全国自衛隊選抜大会がトップを飾った。

準備不足などあって4月の末から短期間にまとめあげた同大会だが、上昇一途の自衛隊チームだけになかなか見応えのある内容であった。

来年以降さらに充実したものとするには、日本協会が積極的にバックアップする姿勢が欲しい。これは、なにもこの大会に限ったことではない。ブロック選手権などにも日本協会はもっと関心を示すべきだ。

本誌に発表されたクラブチームの育成問題についても、多くの意見が日本協会自体の乗り出しを希望している。

トップレベル一頂点強化が現状の最大課題であることは判るが、日本協会の施政が巾広い範囲に及ぶことを期待したい。

ところで各全日本選手権のなかで注目したいのは全日本教職員選手権（8月15日～17日・埼玉県上尾市）で初の試みとして敗者トーナメントを行うことだ。

せっかく出て来ても1回の試合で帰途につくのではという参加チームの意向を聞いて、埼玉協会が全日本教職員連盟と話しあって1回戦の敗者のうちで希望するチームを集め改めてトーナメントを組むものだ。優勝者（?）には埼玉協会理事長杯が贈られるというのもいい話だ。全日本と名がつく以上、勝負の厳しさがすべてといった声も聞かれるが、年1回の集りと考えれば、この企画、賞されてよいと思う。これにならって、全日本学生選手権などで、東京や大阪などに各校が集った場合日程後に、相手を探して"交流"していくこともよいのではないか。

それが全般のレベルアップにつながることは明きらかだ。

特に、中央の水準に一歩でも近づこうと努力している地方勢にとっては、全日本大会は武者修業ともいえる。

序盤戦だけで帰郷するのももったいない話で、出来る限り経験をつむ機会を主催者や主管者が手配してあげてもよいだろう。

話はとぶが、去年のオリンピックで予選で負けたある国のサッカーチームが、わざわざメキシコシティまで来ていた。

本大会に出る各国の練習相手となりながら、短時日にいろいろなタイプのチームと対抗する経験をその国はつんだのだ（S）

「ハンドボール」8月号（第67号）目次

表紙写真＝全日本男子欧州転戦から。全日本―ラインハウゼン（西独）戦（7月7日・ラインハウゼン）

日本、当面の目標 ユーゴを倒す

日本が初参加した第9回タスマジャン・カップ争奪国際7人制ハンドボール・トーナメントは6月27日からユーゴのザビドビッチに5ケ国のナショナルチームが参加して活況のうちに行われた。

ヨーロッパにおける今シーズン最後の7人制トーナメントとあって各国とも意欲的な試合ぶりをみせ、特に日本は世界選手権以外の国際選手権に出場するのは初めてで内外から大きな注目を集めたが、来春の世界選手権で対戦が予想される地元ユーゴに19－18で制勝するという大金星をあげた。しかし、ソビエト、ルーマニアには惜しくも星を落とし、ハンガリーとは引き分け、結局1勝2敗1分(勝ち点3)で3位となった。優勝はソビエトが初の栄冠を獲得、ユーゴは日本戦の1敗がたたって連勝は成らなかった。

タスマジャン杯大会で第3位

疲れからソ連には完敗

▼第1日（遠征第18戦・6月27日ザビドビッチハンドボール場・観衆五千）

ソビエト 30（15－5、15－8）13 全日本

【ソビエト】		得
GK	ビルソン	0
GK	イチエンコ	0
FP	ソロムコ	1
FP	ゾノノブ	3
FP	クルビス	3
FP	クリノブ	3
FP	コヌハブ	6
FP	ハチリン	6
FP	フクハカーゼ	3
FP	サラケ	4
FP	セリバドーズ	1
	7MT	(2)
	計	30

【日本】		得
GK	本田	0
GK	下里	0
FP	飯田	2
FP	有永	1
FP	平岡	1
FP	近森	3
FP	木野	1
FP	東	1
FP	近藤	3
FP	野田	0
FP	早川	0
FP	竹野	1
	7MT	(0)
	計	13

（評）国際トーナメント第1戦。ルーマニアナショナルBとの2勝ハンガリーナショナルとの1勝1敗。それに合宿期間の成果がどのように現れるか大いに期待したのだが結果は完敗であった。

卒直にいえば、ルーマニア、ハンガリーからの3勝に不信さえいだくようなできで、まったく精彩を欠いた。

泣き言になるが、45日間の遠征による精神的、肉体的疲労度。そのうえ地元役員の不手際で開会式前1時間待たされ、選手がいらだっていたことなどが目に見えぬ敗因になった。

ソビエトはベテランと若手がうまくミックスして激しく力強いチームカラーと聞いていた。

日本はまずゲームペースを保ち0・6（一線）ディフェンスを布き、特にポストを注意すると同時に9mラインからの強引なシュートに備えた。

攻撃は相手帰陣の遅い時に反撃（特に2段速攻）を試み、セットオフェンスはシングルポストとダブルポストで臨んだ。

前半両チームとも積極的に射ちあって激しい攻撃戦となり15分6－7と1点の負担。しかし、スタートで相手の早いペースに誘いこまれスパートしすぎたのか早くも疲れが見えはじめ、そこをソビエトのサイドからのスピーディな動きと中央でのブロックを併用したプレーにつかれた。このプレーはこれまで体験したことがなくディフェンスが完全にとまどわされた。

また、ディフェンスのもろさも手伝って前半20分から後半15分までに実に13ゴールを奪われてしまった。

こうなると気のあせりから日本の攻撃はムダなシュートが多くなり7MT2本、ノーマーク6本といろ好機も1回しか活かせぬしまつだ。

ソビエトはその後も日本のへばりによる動きの鈍さを鋭く攻めたてて速攻で加点、大差となった。

敗因を整理すると、防禦に激しさがなく相手を思うとおりに動かしてしまったこと、攻めてはシュートミス（成功率0.264）から逆襲を甘受したこと、公式大会の経験の浅さ（外国ナショナルチームの親善試合と選手権での執念のちがい）勝負根性の不足などである。

しかし、この大敗の教訓は将来大きく活きてくると思う。ソビエトの中では日本の攻撃を巧みに捌いたソビエトGKイチエンコの妙技が印象づけられた。（村田）

攻守に充実の気力示す
見逃せぬGK下里の好守

▼第2日（遠征第19戦、6月28日ザビドビッチ・ハンドボール場・観衆四千）

全日本 19（6－10、13－8）18 ユーゴ

【日本】		得
GK	福本	0
GK	下里	0
FP	飯田	1
FP	近森	3
FP	木野	4
FP	近藤	2
FP	井上	5
FP	野田	4
FP	早川	0
FP	東	0
FP	平岡	0
FP	有永	0
	7MT	(2)
	計	19

※相手メンバーは不明

（評）ユーゴは来春の世界選手権で八分通り対戦が予想される相手。

ユーゴを倒さなければ、日本のベストエイト進出は苦しいといわれているのだが、ヨーロッパでは世界選手権の優勝候補の一番手にチェコ、二番手にユーゴをあげている。両国とも日本と同じ組なのだ。

ユーゴは今シーズン（昨年10月〜今年5月）延べ八千キロのバス旅行による強化遠征を行い18連勝したという。戦う前から威圧感を感じ、しかも前日の完敗もあって選手の気持ちが心配されたのだが速攻で先手、先手をとることに成功、ユーゴは動きが止まってしまい、前半はまったく顔色がなかった。

開始早々サイドからエリヤ内にボールを浮かしてたたきこむプレーに先制点をあげられたが、日本はディフェンスがボディを使って巧く動き、そのあとは再三相手のシュートをカット、速攻に転じて先行をつづけた。

1・5ディフェンスのトップを

守った井上が、ユーゴのローリングの動きをしや断したうえ、速攻でもよく走った活躍が大きかったGK福本の球出しもよく、好調な試合を示した。

また、セットオフェンスでも、ヨーロッパに話題をまいたというユーゴの「3・2・1ディフェンスシフト」をゆさぶり、木野、近森のロングシュートなどで加点、5点差をつけてハーフタイムとなった。

後半になると、ユーゴはさすがにすばらしい粘りから反撃を展開日本も応戦したが25分同点（17—17）に追いつかれた。

そのあとフリースローから近藤—野田と渡してゲットさらにユーゴの攻撃を防いで28分にはセットから近森がロングを決め2点差、19—17となった。粘るユーゴに対して日本のディフェンスもよく当ったが7MTをとられ、GK下里が顔にぶつけ乍らストップしたものの、そのリバウンドを押しこまれて19—18。場内騒然となるうちに試合終了。

日本の特長がよく活かされたことが勝因だが6回の7MTを5回防いだGK下里の絶妙なプレーがなんとしても大きかった。

日本が自信にあふれたユーゴをそのホームコートで破ったのはセンセーションを巻きおこしたようだがなにはともあれ、大激戦の末、体力でおとりながら気力で大敵しかも当面の敵を破ったことは何にもかえがたい自信を与えてくれたといえる。（竹野）

ルーマニアの逃げ切り許す

▼第3日（遠征第20戦・6月29日ザビドビッチハンドボール場・観衆五千五百）

ルーマニア 15（9—8 6—4）12 全日本

【日本】		得
GK	本田	0
	下里	0
FP	竹野	2
	飯田	1
	木野	1
	野田	3
	東	1
	平岡	1
	近森	2
	北井	0
	近藤	1
	田中	0
7MT	（1）	12

※相手メンバー不明

（評）前日ユーゴを日本が倒したことが大反響を呼んでスタンドは五千五百のファンで埋めつくされた。

ルーマニアは合宿最後に対戦したBのメンバーが来征して来ており、2勝の自信がかえって別の作用をし、しかも前日の疲れがのこっているうちにスタート。

2分木野、9分野田のゲットで比較的好調とみえるスタートであったが、この試合に雪じょくをかけるルーマニアの意気ごみは殺気立っており、前半なかばから先行を許した。

しかし、日本も負けずによく射ちかえし連続3ゴール、主導権を奪いかえすべく態勢をととのえたところで近藤が左足大腿部打撲で転倒、広急手当てをうけたあと病院にかつぎこまれるアクシデントがあった。

追いあげムードだっただけにこの打撃はひびき、結果的には勝負の明暗にもつながったといってよい。（編集部注・近藤選手は翌期退院）

後半、ルーマニアは1点のリードを得ているため心にくいばかりのスローペース。日本は完全にじらされ、そのまま逃げ切られてしまった。

後味の悪い一戦だったが、この日も本田、下里両GKが7MT5本のうち2本を止めて話題をまいた。（勝）

終盤に追撃の力備う

▼第5日（遠征第21戦・7月2日タスマイダンハンドボール場・観衆約六百）

全日本 21（9—11 12—10）21 ハンガリー

【日本】		得
GK	福本	0
	下里	0
FP	野田	4
	井上	1
	木野	4
	近森	3
	飯田	4
	竹野	4
	平岡	0
	有永	1
7MT	（1）	21

※相手メンバーは不明

（評）日本は勝てば3位、負ければ最下位。ハンガリーとは1勝1敗後の決着戦でもあった。

照明が暗くやりにくそうだったが点のとりあいを予想し得点目標22〜23点、失点20点以内でスタート

策戦としては帰陣の早さと、攻撃面では相手の一線防禦に対してポストからのダブルポストチェンジにサイドチェンジをミックスし、相手をゆさぶりシュート機をつかむことなどをたてた。

相手のなかでも体格の特によいサイドのマロシーとフェニョールにはボディアタックをしかけ、全般にボディチェックの多用を試みた。

近藤が欠場したことから攻撃のコンビが乱れ、しかも転戦の疲労から気力にもなにか欠けてスピードがなく、いわゆる生きたプレーが少いため前半は相手にペースを握られた。

後半に入っても、相手の疲労の出たところを反撃に転ずるハーフタイムでの策戦がなかなか実らず10分12—15とかえって点差をあけられ、このままかと思えたのだが12分以後相手の攻撃ミスに乗じて連続3ゴール、15—15と追いあげ勝ちムードとなった。そのあと、互いに攻防両面でミスをつづけ、得点の入れあいとなり5回のタイこの間日本は3本のノーマークを落とす不調が勝てる試合を自から捨てる結果となり、誠に残念だった。

内容的には満足すべきものが少かったが、後半に追いあげられる力が備わって来たことは大いに喜んでよいと思う。（村田）

▽日本チーム以外の大会記録

ハンガリー 11（6—5 5—3）8 ルーマニア
ソビエト 23（11—7 12—11）18 ハンガリー
ソビエト 15（8—8 7—7）15 ユーゴ
ソビエト 21—14 ルーマニア
ユーゴ 22—21 ハンガリー
ユーゴ 17（9—6 8—6）12 ルーマニア

タスマジヤン杯勝敗表

	ソ	ユ	日	ハ	ル	勝	負	分
①ソビエト	…	△	○	○	○	3	0	1
②ユーゴ	△	…	●	○	○	2	1	1
③日本	●	○	…	△	●	1	2	1
③ハンガリー	●	●	△	…	○	1	2	1
⑤ルーマニア	●	●	○	●	…	1	3	0

（編集部注・この大会は現地では「タシマイダン」（地名）と呼ばれているが、本誌ではＩＨＦ公報などにしたがいこれまで通りの名称をとります）

3ケ国で親善試合（21戦14勝）

タスマジャン・カップ争奪トーナメントへの出場前後、日本チームはルーマニア、ハンガリー、西ドイツで親善試合を行った。先号既報のルーマニア第9戦以後の模様をお伝えしよう。

なお、各国での通算成績はルーマニア14戦10勝2敗2分、ハンガリー3戦2勝1敗、西ドイツ4戦2勝1敗1分であった。

ルーマニア

▼第10戦（6月10日・プロイエステ）

全日本 24（14−10、10−9）19 プロイエテ・テレアジェン

【日本】		得
GK	福本	0
	本田	0
FP	野田	6
	近藤	1
	東	0
	木野	7
	近森	4
	中井	0
	北井	0
	有永	1
	飯田	4
	竹野	1
7MT	（1）	24

※相手メンバー不明

（評）日本は一線防御を布いたためロングシュートに対する詰めが悪く先行される。しかし攻撃ではネデフ氏から教えられたコンビプレーが随所にみられ、なかなかいい動きを示せた。

19〜26分の間に連続4ゲットし前半はそのまま終わるかに思えたが、帰陣の遅さをつかれ、相手の速攻を許したのは拙かった。

ディナモとホームコートでは常に1点差の接戦を演じるという相手だけに、わずかなスキでもついてくるのは、さすがにトップチームといえる。

後半に入って、日本は攻守とも動きがよくなり、相手の攻撃を散発におわらせて主導権を握り次第に点差をあけて楽にゲームを進めた。あまり点が開かなかったのはサイドからの相手シュトのカットを両足防禦とみなされ7MTを課せられたことが原因といえる。

ネデフ氏夫妻がブカレストから来場、日本の動きに満足して帰られた。なお今日からデルマン氏が日本チームに同行して指導してくれることになった。デルマン氏は第4回世界選手権でルーマニアが優勝した時のトレーナー。（竹野）

終盤に勝負を決める

▼第11戦（6月11日・ブラショフ球技場）

全日本 23（13−10、10−9）19 ディナモブラショフ

【日本】		得
GK	下里	0
	福本	0
FP	竹野	3
	藤中	1
	早川	0
	野田	4
	北井	1
	有永	0
	木野	4
	近藤	3
	飯田	4
	近森	3
7MT	（1）	23

▽日本FP東、中井

※相手メンバー不明

（評）ブカレスト市の北西200K。この国第2の都市で人口は24万という。山と山の谷間に開けた街でコートはコンクリート（屋外40×20m）。

女子の試合につづいて午後5時半開始。相手はA（1部）リーグの6位で、チームの要といわれている190cmのGKがこの日は病気欠場。残念だ。

開始早々1点を失ったが、すぐに飯田の中央でのジャンプシュート、野田の右サイドからのプロンジョンシュートが連続決まって4点をあげ、楽に試合が進むかにみえたが、それもつかのま、一進一退となり、いちどは4点差をつけ主導権を握るべきヤマ場もあったのだが、僅少差で前半を終った。

後半に入って相手のフエイントなどの個人技にまどわされて13−13に追いつかれ14−14、15−15と粘られたが、後半20分を過ぎてから日本は再び力をもりかえし勝負のメドをつけた。

後半は特にセット攻撃でのブロックプレーなどを折りこんでみたコンビネーションプレーが再三成功して観衆の拍手をあびた。

一昨日のゲームもそうだがファンが実にハンドボールを知っていて、気持ちのよい盛りあがったムードの中で試合が出来た。（勝）

ディフェンスに数々の課題

▼第12戦（6月14日・シビュ・観衆二千）

全日本 22（10−7、12−12）19 シビュ選抜

【日本】		得
GK	本田	0
	福本	0
FP	竹野	3
	飯田	3
	有永	3
	平岡	3
	近森	3
	木野	2
	中井	0
	東	0
	近藤	2
	野田	3
	（1）	22

※相手メンバーは不明

（評）シビュ市はルーマニアのハンドボール発祥地。オールドファンが沢山スタンドに集った。相手は今年からB（2部）リーグ入りするという新結成のチーム。そのためかコンビが悪く、個人技を封じる策戦で、失点は15点まで、シュート（成功）率55〜60％という目標をたてて臨んだ。

前半はじめは互いに相手の出かたを探っていたが5分、変化のあるコンビから飯田がシュートを決めて先行、しかし12分防禦の詰めの甘さから単発シュートを許し3−5とリードされた。

しかし、このあたりから攻撃のリズムがよくなり20分までに5点を連取、8−5と逆転。このまま点差が開いていくかとみえたが相手ポストマンへのマークが弱くシュートの詰めの遅さもあって12−12でハーフタイム。後半すぐさま巧い攻撃で3点をリード、ペースは握ったものの、ディフェンスの悪さはなおらず4本の7MTなどで後半も7点を失った。

攻撃面では変化に富んだ無理のないセットオフェンス、速攻は目標のシュート率にまずまず（41シュート、0.536）だった。

やはり日本の課題はディフェンスだ。7本の7MT（6失点）をとられた原因も防禦法の悪さ、もろさからで、相手のポイントゲッター、チャナプ（左腕）のキープ

力、フェイント力、ポストへの好配球そして地をはうような強引なシュート力に11点を叩きこまれたのも反省させられる。19失点はなにはともあれ問題だ。早い帰陣、ポストへの激しいマーク、強いファール、シューターに対する詰め課相手に自由を与えぬ動きなどが題である。（村田）

ナショナル(B)に2連勝

▼第13戦（6月16日・ディナモ球技場）

全日本 15（7－7、8－6）13 ルーマニア・ナショナルB

【ルーマニア】		得
GK	デンカー	0
GK	ネゴラン	0
FP	ダンマリン	5
FP	キチド	4
FP	ドミトル	1
FP	リ　ク	0
FP	マリネスク	0
FP	パラスキーワ	0
FP	コアサ	0
FP	サウリンピウ	3
FP	コービック	0
FP	アブラメスク	0
7MT	（3）	13

得	【日本】	
0	下　里	GK
3	飯　田	FP
5	野　田	FP
2	近　藤	FP
2	近　森	FP
2	木　野	FP
1	平　岡	FP
0	竹　野	FP
15	（0）	7MT

（評）前半、長身を利したキチドのロングシュートで先行され、また大きなステップによるシュートにディフェンスとGKがまどわされゴールを割られるケースが再三あった。しかし日本はポストを固め相手のペースにはまることなく落ち着いて試合を進めた。

攻撃面では、木野がマン・ツウマンにつかれたが、ロング、サイドからゴールを狙って17分には4－4とした。このあと25分まで速攻とセットプレーをおりまぜて5ゴールを決めて優位に立ち2点差をつけて前半を終えた。

後半に入ってからも、2点の余裕が日本選手の動きを軽くし、速攻で確実に加点した。ルーマニアは、日本選手の動きにディフェンスが合わないとみるや、しだいにプレーが荒くなり、攻撃も単調・強引なシュートがふえた。

このラフな展開に日本がつりこまれなかったのは、先行していたゆとりもさることながら、外国チームとの試合に対するかけひきが身についたということもできよう。

これは大きな収獲だ。点差の上では後半5分に5点、11分には6点をリードしたのだが、相手の激しい突進に次第に押され、この間2本の7MTを決められ追いこまれた。

後半20分からルーマニアはマンツウ・マンによるオールコートアタックに転じ、必死の反撃をしかけて来たが、日本もよく動き24分28分に得点したのが利いて快勝した。

ナショナルBというのは二軍的な意味ではなく、Aの中の若手とA・B間を往復しているスタッフで日本がこのチームから勝利を得たのは意義があると思う。

ルーマニアもまさか日本に苦杯を契するとは思っていなかったようで、たえず先手をとられての敗戦は衝撃をうけたようだ。

日本選手一人々々がプレーに対して厳しさをもって来たこと、チームとしてのボール・キープ力がついて来たことも勝因の一つだろう。（竹野）

▼第14戦（6月17日・ディナモグランド）

全日本 12（7－6、5－5）11 ルーマニア・ナショナルB

	【日本】	得
GK	下　里	0
GK	本　田	0
FP	竹　野	1
FP	飯　田	5
FP	有　永	0
FP	近　森	2
FP	木　野	2
FP	近　藤	2
FP	野　田	0
7MT	（0）	12

※相手メンバーは不明

（評）ルーマニアにおける最終戦コート入口には試合の看板が大きくかかげられている。

相手は、前日の思いもかけぬ一敗に、選手はもとより、コーチ陣も斗志をみなぎらせているのがよく判る。

試合開始の1時間前まで豪雨となり、コートの水をはき出すほどの悪コンディション。日本は前日の一戦で大きな自信を得、しかも悪天候にもかかわらず日本大使、参事官夫妻、在ルーマニアの商社員10人ほどが日の丸の小旗をふった応援で選手もいっそう力づけられた。

試合は予想どおり、立ちあがりから激しいぶつかりあいとなった。

前半なかばすぎ、日本は4－2と2点差をつけたが、それ以外は常に1点差。文字通りのシーソーゲームを展開した。

ルーマニアの強引なプレーに日本は体力のハンデを乗りこえ一歩もあとに引かず対抗。

前日5点を叩き出した野田が徹底的にマークされ、ディフェンスのシフトも2・4、0・6（一線）を併用するなど苦心のあとをみせた。しかし日本もディフェンス面でポストマンに対するマーク、ロングシューターに対する詰めなどがようやく身についた感じで健斗し、攻めては飯田が先制点にはじまって要所にポイントをあげる活躍を示した。

日本の盛んな意気が終始感じられたのだが、苦しい試合となったのは7本の7MTをとられ、その内5本を決められたことだ。

ディフェンスの足場の悪さをついて、策戦的に7MTを得るようなプレーを見せたルーマニアの老かいさにうまく乗せられたともいえるが、今後研究、反省を要する課題ではある。

この結果、日本はナショナルBから2勝をあげた。世界の最上位に君臨する同チームに連勝したことは、相手に練習不足のハンデがあったにせよ大きな自信を得ることに結びつくだろう。（勝）

最大の収獲は〝自信〟

ルーマニア・ナショナルBが日本に2敗したことはルーマニア関係者に大きなショックを与えている。

日本の勝因は2試合とも選手が死にものぐるいであったことだ。

その気力に加えてディフェンスと頭脳（試合展開力）だと思う。

しかし、私自身としてはこの2勝を問題にしていない。一度や二度はこういうこともあるだろうという気持ちだ。この勝利が日本の世界上位突入を約束するほど〝世界〟は甘くないのである。

ある選手が、『ディナモ×ステアウアの試合をみて、あの連中を主力としたルーマニアBに勝てたなんて信じられない。だけど自信がつきました』といっていたのを聞いた。この言葉だけがこのルーマニアでの強化合宿の成果といってよいだろう。この自信をだいじにしたいと思う。（村田）

※本誌では次号から〝欧州遠征リポート〟を連載の予定※

ハンガリーとは星分ける

ハンガリー

▼第1戦（遠征第15戦、6月20日ブダペスト体育館、観衆二千）

全日本 24（10—10／14—13）23 ハンガリー・ナショナル

	【ハンガリー】	得
GK	ホラアバース	0
GK	ポーシー	0
FP	カロ	5
FP	マロシー	1
FP	フエンニヨ	4
FP	バス	2
FP	シモ	4
FP	タカシー	3
FP	メエザロス	2
FP	アドラジヤン	0
FP	コバツシ	1
FP	クレイン	1
	(4)	23

得	【日本】	
0	福本	GK
0	下里	GK
2	竹野	FP
4	飯田	FP
2	有永	FP
1	平岡	FP
3	近森	FP
7	木野	FP
4	近藤	FP
1	野田	FP
24	(0)	7MT

（評）ハンガリーでの第1戦は同国ナショナルチーム。フロア（40×20m）が悪く走るたびに音がしてやりにくい。

雨天の中、日本大使はじめ二千の観衆がスタンドを埋める。

ハンガリーとは第6回世界選手権で顔が合い25—30で敗れているが、ルーマニアの最後にナショナルに連勝したことで自信がみなぎつており、今日の一戦にどんな結果として現われるか興味があった。

相手の平均年令24・7才。身長186、体重82と若く大きい。メンバー中、前回の世界選手権出場者は7名。ルーマニアの特徴であるコンビの中に個人が強引にプレーするのに対しハンガリーは実に速いローリング戦法で、完全なコンビネーションプレーを持ち、逆サイドにポスト・マンが居て、サイドからローリングしながら早い動きで、中央でディフェンスを釘づけとし、ロングシュートを射つか、それをサイドに廻して、1人を余しシュートに結びつけるというオフェンスを見せた。

スピードを待特とし、しかも完全にボールを握り、パス、フェイントが多彩であった。

試合そのものはナショナルチーム同士の対戦としては勝負の厳しさがみられず、ディフェンスもおとなしく、互いに失点を多くした。

日本は策戦として、失点を15～17点におさえること、即ちディフェンスに徹底し攻めてはシュート率をよくし20ゴールを目標においた。

一線防禦（0—6）を布き、攻撃は速攻では第2段階（フオローアタック攻撃）の成功、セットではボールを長く保持して、変化のある攻めから遠目のシュートを狙わせた。

前半、日本は6—4と先行するも、そのあと3点を許し逆転された。しかし、すぐ追いつきその後は一進一退。互いに主導権を握れず、後半15—16、17—18と2回リードされたが、それ以外はたえず先行することができた。

24分に2点リードしたがダメ押しの1点を得られぬうちかえって追いこまれ、23—23から29分30秒ようやく決勝点をあげて苦しい戦いに決着をつけた。

両チームとも攻撃テンポが早いため守りが甘くなり、特に日本は相手のスピード豊かなコンビネーションにディフェンスの間隔を拡げられてしまいシューターに対する詰めも悪く大量点を奪われた。

攻撃面では、後半わずかにテンポが早まったが、シュート率は69％（36本）と目標に達せた。今後この攻撃目標を安定させながら防禦をよくすることが大きなテーマだ。

そのためには、防禦システムを相手のオフェンスによって変化させる訓錬をしなければならぬ。

ハンガリーのプレーの中では左腕・カロが9mラインからバックシュートを2本成功させたのはまことに鮮やかであった。（村田）

ハンガリーの雪じよく許す

▼第2戦（遠征第16戦、6月21日ブダペスト球技場）

ハンガリー・ナショナル 31（18—12／13—8）20 全日本

（評）コートはアスファルト製。どうも苦手だ。

相手は昨日の雪じよくの意気がありありとみられ、日本も連勝を狙って気力充分。

シュートのカットをうまく結びつけて先行、ハンガリーは強引に攻めこんで来るがよく防いで3—0と立ちあがりは有利。

前半15分を過ぎたところで雨が降り出し、日本の動きもこのあたりからしめり勝ち。20分以後はハンガリーに一方的に攻めこまれ主導を権奪われた。

コートが滑るためディフェンスが大きく広がされ、ワン・クロスでシュートされたり、攻撃面でも凡ミスが続き、そのスキに7点を失ってしまった。

後半になって、雨がやんだが前半の失点が重くのしかかり、攻めこんでもすぐに相手の反撃を許して点差はちぢまらず、20分すぎメンバーを大きく変え、よく走って追いかけたものの、調子にのるハンガリーからペースをもぎとれず大差をつけられた。

出足はよかったのだが、セットの時に何か動きが悪い。しかもいちどストーリングをとられたため無理なシュートが目立ち、雨のためか立つたままのパスやディフェンスの小さなミスが重ったのは反省させられる。前半20分からの10分間に7ゴールを奪われ、この間無得点だったのも一考を要そう。

ハンガリー選手の体格は身長が最低179、最高196。体重が72～96Kで体格差をまざまざみせつけられた場面もあった。こうした経験を活かして今後の前進へ結びつけたい。（竹野）

前半のリード活かす

▼第3戦（遠征第17戦、6月23日コムロ球技場、観衆千五百）

全日本 30（13—14／17—13）27 コムロ

（評）ペーチからバスで30分。ユーゴとの国境近い町。20年前に鉱山労務者によって開けたといわれ日本選手を追って子供たちがサインをしきりにとせがむ。

コムロの先制点で始まったが、日本も速攻から野田、ポストから近森が押しこんで2—1。しかしコムロがよく粘り、苦しい試合経過になる。ルーマニアとも異ったタイプのハンガリーの早いボールばなれにディフェンスがとまどい勝ちなのが一因だ。2—4ディフェンスを布いたが効果はあまりなく、相手のすばやい動きに失点したが11—11から北井の7MTでようやく先行、早川の独走などあり4点差で後半を迎えた。

このリードに後半は余裕ができ17名をフル出場させたりオールコートアタックも試みた。ルーマニアからハンガリーへ移ってディフェンスに迷いがのぞかれるのはきがかりだ。（勝）

ナショナルと好試合展開

西ドイツ

▼第1戦（遠征第22戦、7月4日・ハスロフ）

全日本18（9−9 / 9−9）18ハスロフ選抜

【日本】		得
GK	本田	0
	下里	0
FP	井上	1
	飯田	2
	北井	0
	平岡	0
	近森	4
	木野	3
	野田	3
	中井	0
	早川	1
	東	1
		18

▽日本GK福本（得0）FP竹野（得1）藤中（得2）

※相手メンバー不明

▼第2戦（遠征第23戦、7月7日・ラインハウゼン）

全日本27（9−12 / 18−12）24ラインハウゼン選抜

【日本】		得
GK	本田	0
	福本	0
FP	竹野	0
	藤中	4
	飯田	3
	近森	1
	木野	2
	中井	1
	早川	1
	東	4
	北井	3
	井上	7
7MT（2）		27

▽日本GK下里（得0）、FP野田（得1）、平岡（得0）

※相手メンバー不明

▼第3戦（遠征第24戦、7月9日・キール体育館・観衆五千五百）

西ドイツ24（14−9 / 10−7）16全日本

【日本】		得
GK	福本	0
	本田	0
FP	竹野	0
	飯田	2
	平岡	3
	近森	3
	木野	5
	東	0
	藤中	1
	近藤	2
	井上	0
	野田	0
7MT（2）		16

【西ドイツ】		得
GK	ボーデ	0
	ヴォイト	0
FP	J・ブランド	4
	フェルドホフ	3
	ミューラー	1
	ムンク	1
	ルブキング	6
	ロジェ	0
	アーレンドセン	1
	ワーナット	5
	ウェルツ	0
	ヘニンガー	3
（2）		24

（評）各地における日本の活躍が関心を呼んでシーズンはずれとしては異例の大観衆がスタンド（七千人収容）を埋めた。

ドイツの各選手は、11人制シーズンの最中とあって豪放な投力と走力を駆使したプレーを展開、特に〝世界最高の選手〟といわれるルブキングのプレーは「巧い、すばらしい」というより「おそろしい」と形容すべきであった。彼はハンドボールのあらゆる要素をすべて備えているのだ。

こうした相手に日本は得点目標20点とし、相手の1・5防禦に対しシングルポストから素早くダブルポストに変化する攻撃を試み、守りの面ではルブキングの徹底マークを企った。

前半は、速攻こそ出なかったがコンビネーションプレーで健斗、先行されながらも1点差に再度つめよったが、ここぞという時にルブキングの強引なシュートを喫して追いつけなかった。

後半、体力的なへばりが著しく速攻してもフォローがなく、そのスキをつかれて差を拡げられてしまった。速攻が決まっていれば1〜2点差に留め得ただろう。

ドイツのヴィック・トレーナーは「2年前に見た時より45度での攻防の力がついたこととGKの進歩」を賞してくれた。我々としても点差ほど実力の開きはないと思う。それにしてもルブキングはすごい。特に前半終了2秒前、GKからのパスをハーフラインで受けそこからステップシュート。GKは判っていながら矢のごとく速いそのシュートにゴールを割られた。

この快技に敵味方それに五千のファンはあっけにとられてしまった。西ドイツのハンドボールは実にリズミカルで「教科書」といってもよい。学ぶべきものの多い試合だった。（村田）

▼第4戦＝遠征最終戦（7月11日西ベルリン）

全日本16（6−5 / 10−8）13西ベルリン選抜

【日本】		得
GK	福本	0
	下里	0
FP	飯田	1
	有永	1
	平岡	4
	近森	1
	木野	2
	中井	2
	東	0
	藤中	1
	北井	1
	近藤	3
7MT（1）		16

▽日本FP早川（得0）、野田（得0）

※相手メンバーは不明

（評）遠征の最終コースに入ってさすがに疲れが目立ち、しかも西独の4試合はかなりの強行日程だ。ハスロックでは地元協会のきも入りで、全員が一人々々になっての民宿、勝手のちがう生活にとまどった。そのせいでもあるまいが試合も厳しいプレーがなく点のとりあいを演じた末、引き分けに終った。

第2戦はルーマニアナショナルの主力ナトが留学中とかで相手チームに加わりシャープなプレーを見せた。日本は前半のリードに余裕を持ち制勝した。

第4戦は今回の遠征最終戦。勝利でしめくくろうという気が焦りになってシュートミスが多く拙い試合ぶりだった。

後半ようやくディフェンスが立ち直り、攻撃面でもチャンスを逃さず逃げ切った（勝）

全日本、元気に帰国

来春の第7回世界男子7人制選手権で上位入賞を果たすため5月14日からルーマニアでおよそ1ヶ月半の強化合宿を行いそのあとハンガリー、ユーゴ、西ドイツ各国を転戦していた全日本男子ナショナルチーム村田弘監督ら一行20人は7月14日午後4時10分羽田着のフランス航空機で元気に帰国した。

滞欧中の試合成績は25戦14勝6敗5引分で、このうちナショナルチームとの対戦成績は9戦4勝4敗1引分であった。村田監督・勝・竹野両コーチは今回の遠征の成果を次のように話してくれた。

いちばんの収穫は精神的には外国選手に対するコンプレックスがなくなり、ヨーロッパとの差はそう遠く大きくはなれたものではないという自信を選手たちが持ったこと、実際面ではユーゴに勝ったこととナショナルチームと五分の成績を残したことだろう。ユーゴ戦は全員の気力がすばらしく盛りあがり、国際試合は精神力の斗いであるということを経験し得たのが大きい。ディフェンス力もあがり外国チームの動きが読めるようになったのも進歩だ。

しかし課題がまったくなくなったわけではない。特に終盤に追いつかれる体力の不安は大きなテーマとなろう。わずかなスキから引き分けたり負けたりした試合が多かったのもその面が原因している。

来春の世界選手権への見通しは今はなんともいえず、各国の日本に対する研究も盛んなので残された期間いっそうの精進が必要だと思う。

日体大接戦の4勝2敗

対韓国学生

6年ぶりに再開のなった日韓学生交流戦は7月11日から20日まで全日本学連代表・日体大が遠征して6試合が行われた。

韓国学生界のレベルは予想どおり著しく向上し、日体大の成績は4勝2敗とこれまでにない接戦となった。

20日元気に帰国した関係者から、試合の模様などを聞いてみた。

荒井清美監督の話 予想していた以上に韓国学生界のレベルは向上、特にどの選手も先天的なボールゲーム・センスを持っているのが印象深かった。

4勝2敗という成績はまずまずだと思うが、6試合のうち5試合が32×18mというせまい室内コートのため、選手たちにとまどいがみられた。

韓国選手の体格、体力は日体大の選手よりも全般的に秀れておりしたがってシュート力、ジャンプ力にたくましいものがみられた。

現段階なら卒直にいって日本の水準の方がリードしているだろうが、このままの勢いで伸びれば日本の強敵になる可能性は充分にあると思う。今回の交流は、各試合とも多くの観衆が集まり、第1戦と最終戦はTV中継も行われるなど韓国での関心は非常に高く、円形体育館を埋めた熱狂的な歓声には驚ろかされた。

北川勇喜コーチの話 韓国のプレーは「たくましい」と表現するのがふさわしいと思う。秀れた跳躍力を使ってのシュートや45度からのとびこみそれにコンビネーションなど考えていた以上にレベルは高かった。

また、各選手ともキープ力とスピードがあり、気をぬいた瞬間にステップや、スタンディングシュートをかなり射たれた。

ディフェンスは詰めに詰めて、ボール保持者には徹底的に当ってくる。

韓国学生のレベルは関東学生の1部上位校と同程度。対戦したなかでは慶熙大、成均館大、円光大という順だと思う。

田中秀夫役員（副団長・全日本学連理事長）**の話** 韓国関係者との談合で今後1年ごとに招待しあうことを決めてきた。来年は6月頃韓国代表（単独チーム）が来日する予定である。

全般にレベルアップしており、特に個人技は注目に価するが普及面では未だしのようでトップチームはソウル周辺の8大学と今年新発足した実業団（映画会社）ぐらいらしい。

女子は高校以上のチームはないそうだが、高校のレベルはすばらしいものがある。日本の実業団クラスといってよいだろう。

※本誌では日体大韓国遠征関係の詳報を次号に特集する予定です※

後半相手の逆転許す

▼第1戦（7月12日・ソウル・奨忠体育館）

成均館大 19（8－11、11－7）18 日体大

得	【日体】		【成均】	得
0	海江田	GK	奇忠植	0
0	大村	GK	李承宰	0
3	氷海	FP	章載奉	0
3	谷藤	FP	金永煥	0
2	大川	FP	宋錫仁	7
4	笠原	FP	金乗達	3
0	塩崎	FP	曹正奎	2
0	寺田	FP	安俊鎬	0
2	松原	FP	朴烔淳	5
3	斎藤	FP	黄永基	1
1	亀谷	FP	金秀男	0
0	池田	FP	朴舜培	1
18	（2）	7MT	（5）	19

前半のリード活かし勝つ

▼第2戦（13日・ソウル・奨忠体育館）

日体大 15（8－6、7－7）13 慶熙大

得	【日体】		【慶熙】	得
0	海江田	GK	金英会	1
0	大村	GK	金昌鉱	0
1	氷海	FP	李鐘南	4
3	谷藤	FP	黄致範	1
0	大川	FP	全福守	0
2	笠原	FP	高光錫	1
0	塩崎	FP	姜顯横	2
0	松原	FP	柳在忠	1
0	池田	FP	李文植	0
8	斎藤	FP	朴正求	0
1	亀谷	FP	朴鐘甲	0
0	安達	FP	季栄竜	3
15	（1）	7MT	（1）	13

▼第3戦（7月14日・仁川公設運動場＝屋外）

日体大 20（10－8、10－7）15 韓国学生選抜

得	【日体】		【韓国学生】	得
0	海江田	GK	金英会（慶）	0
0	大村	GK	奇忠植（成）	0
0	池田	FP	全福守（慶）	0
3	谷藤	FP	金乗達（成）	3
1	大川	FP	姜顯横（慶）	2
3	笠原	FP	宋錫仁（成）	1
6	塩崎	FP	李鐘范（円）	2
2	氷海	FP	金弘植（円）	1
1	松原	FP	趙徳済（岑）	0
3	斉藤	FP	秋岩鉐（　）	1
1	亀谷	FP	朴烔淳（成）	4
0	安達	FP	黄致範（慶）	1
20	（1）	7MT	（1）	15

一気に得点、振り切る

▼第4戦（17日・全州高校体育館）

日体大 14（7－2、7－7）9 円光大

得	【日体】		【円光】	得
0	海江田	GK	陳奉喆	0
0	大村	GK	柳福烈	0
2	斉藤	FP	李鐘范	3
2	谷藤	FP	兪奉濬	2
1	大川	FP	権五衡	0
0	笠原	FP	鄭邦克	0
2	塩崎	FP	崔圭千	1
2	氷海	FP	趙南信	1
2	松原	FP	李竜雲	0
0	池田	FP	蔡庚錫	1
3	亀谷	FP	朴来吉	0
0	安達	FP	金弘植	1
14	（2）	7MT	（0）	9

▼第5戦（18日・ソウル・奨忠体育館）

全慶熙大 12（6－4、6－7）11 日体大

得	【日体】		【全慶熙】	得
0	海江田	GK	金昌鉱（現）	0
0	大村	GK	金英会（〃）	0
0	大川	FP	高炳勲（O）	2
1	谷藤	FP	全福守（現）	0
3	笠原	FP	姜顯横（〃）	0
4	斉藤	FP	金甲経（O）	5
1	塩崎	FP	徐康錫（〃）	3
1	氷海	FP	李鐘南（現）	0
1	松原	FP	高光錫（〃）	0
0	亀谷	FP	金京植（O）	0
0	池田	FP	柳在忠（現）	0
0	安達	FP	徐永錫（O）	0
11	（0）	7MT	（0）	12

（注）全慶熙大メンバー中の（現）は現役、（O）はOB。

▼第6戦＝遠征最終戦（19日・ソウル・奨忠体育館）

日体大 13（6－3、7－9）12 成均館大

得	【日体】		【成均】	得
0	大村	GK	奇忠植	0
0	海江田	GK	李承宰	0
4	谷藤	FP	曹正奎	3
3	大川	FP	章載奉	1
0	笠原	FP	金乗達	5
1	塩崎	FP	朴舜培	0
4	斉藤	FP	金永煥	0
0	氷海	FP	宋錫仁	1
1	松原	FP	安俊鎬	0
0	井上	FP	朴烔淳	2
0	亀谷	FP	黄永基	0
0	安達	FP	金秀男	0
13	（1）	7MT	（2）	

（注）第3戦の韓国学生メンバー中、（慶）は慶熙大、（成）は成均館大（円）は円光大、（岑）は岑南大

世界選手権基金運動はなお検討

—国体後に正式決定か—

日本協会がかねて検討を重ねていた「世界選手権基金運動」は本誌前号既報の通り、全国評議員・理事に郵便投票を求めていたが、〆切までによせられたのは三十一票であった。

支持する投票も三分の二近くあったが、原則的にはこの構想に賛同しながらも、実施上の種々の問題には多くの意見がよせられ、必ずしも全会一致の賛同を得られなかった。運動の性質上、全国の球界の賛同が得られないとその施行にすこぶる困難が予想されるので7月10日の定例常務理事会の席上では、会長をはじめとする合議スタッフが各地の声を聞いた結果をも勘案し、なおこの趣旨をよく広く球界に浸透させることが必要であるし、また規定の細部にわたって、事務の簡素化を図れるよう再検討し、球界内の意志を一つのものにまとめあげていくことになった。

この基金のような重要な問題はやはり、全国から臨時評議員会・理事会を開催し、充分な討論をつくしてから決めるべきだとの意見もあり、こういう意見を総合し、この運動に対する理解を深めるように、決定はしばらく延期し、10月の長崎国体時に開かれる予定の臨時評議員会・理事会に改めて、今回の投票による意見を含めた修正案を提出することになった。

田村会長は『充分に趣旨を球界に理解してもらった上で、事務的に負担にならない方法で、この運動を推進したい。時期的に多少遅れても、ぜひとも球界をあげて、この運動を成功させたいものだ。』といっている。

またそれとともに、積極的な資金集めの手も具体的に検討することになった。外国チームを招くことを中心に、各地で好試合を開催し、入場料収入を中心にして、積極的に資金集めを行なうとともに普及・強化に努めようというのが基本的な考え方である。

種々の問題もあろうが、全国が一丸となって、協会創立以来三十年の懸案である財源問題に積極的にとりくまねばなるまい。

財源がないということで多くの施策がそのままにされているものが多い。ある財源を各部門でゆずりあって使うのでなく、必要な財源はなんとかそれを集めるという方向に考え方を向けていかなくてはいつまでたってもこの現状を打解することはできまい。

全国に数万人いるハンドボール関係者一人一人が自分自身の問題として、この財源問題をうけとめ、それぞれのできるところで、どのようにして、これを解決していく方法を考え、実行に移してほしいものだ。

あなたまかせにしていたのではいつまでたっても、ラチのあく問題ではない。

全員でこの課題にとりくもうではないか。

評議員・理事の主な意見

「趣旨には賛成するが実施面で問題が多い」とする評議員・理事側の意見によって『募金委規程』の施行は、しばらく見送りのかたちとなったが、投票と同時に寄せられた主な意見を拾い出してみよう。

実施面での問題点として指摘されたのは「徴収し送金する繁雑な事務処理」への疑問だ。高校・一般・評議員・賛助者の4段階に分け年額とすべきだというような手数を省く方法も提案された。

こうした大課題を検討するのに郵便投票で賛否を求めたことに対する批判もあり、常務理事会（合議スタッフ）が一応賛成票を多数得ながらも秋まで決議を延期し再検討の線を打ち出したのはこの2点に起因しているとみられよう。

このほか「年次の途中であり実施するならば来年度からに」「対象の大会をブロック大会以上に」「ナショナルチームの巡回などで別の募金法を考えよ」といった意見も多く「代表選手を生んだ都道府県を中心の募金」という新提案もあった。また「これ以上地方組織やプレイヤーに経済的な負担をかけるな」という声が予想以上に多い。

なお、日本協会では賛否(投票)を評議員51名（定数）、常務理事理事30名（河内鋭雄氏辞表提出による欠員1名）から求めたが〆切日の6月30日までに返信が送られたのは31名。いかに未投票の場合は賛成とみなすという一条があったにせよ定員の半数に満たなかったのは肯けない。

月例常務理事会議事録

—6月13日・（抜すい）—

一、欧州遠征チームの中間報告・山田理事出席の国際審判講習会の日程などが報告された。

一、財務部から、今年度は種々の財源を合せても、また基金が順調にいったとしても赤字が予測されるとの報告があった。また旅費規定は財政状態が見通しがつかないので、しばらく保留することとしたいとのことで承認された。

一、高専と大学院生の登録と出場資格について、

インターハイと国体は3年生以下（19才未満の年令制限により）左記条件内ならば国体の高校選抜に加えること可

4・5年生は短大と同様大学に含める。大学院の件は保留とする。高専連盟（準備中）との問題もあり、高体連とも協議する。

この他、日体大の遠征関係、全日本学連の理事長が安藤純光氏の辞任にともない、田中秀夫氏が理事長に就任する。自衛隊の全国大会に関してなどの報告が行なわれた。

技術部から全日本教職員選手権の時に「全国中学校指導者講習会」（教職員連盟と技術部共催予定）を文部省に申請し、共催が得られれば実施する意向が示された

女子世界選手権年内開催せず

国際ハンドボール連盟（ＩＨＦ）では、昨年流会となった第４回世界女子７人制選手権を今年の11月または12月に再開する方針をたて加盟各国の意見などを求めていたが、このほど中止と決め、正式発表（ＩＨＦ公報78号）した。

次回は一九七一年に行われるが開催地はユーゴーなどが話題にのぼっているが、明年の総会で決定されよう。

この問題はいちぢソビエトでの再開が有力と伝えられ、ＩＨＦも実現へ努力していたものだが、各国の準備期間があと半年足らずのこと、男子の予選が11月～12月に各地で行われることなどの理由も手伝って中止に踏み切ったもの。

なお、昨年流会した各国チャンピオンチームによる男女のヨーロッパカップトーナメントは９月から予定どおり今年は開かれることになった。

男子世界選手権の日程が内定

ＩＨＦでは来年２月26日から３月８日までフランスで開く第７回世界男子７人制選手権の日程をこのほど内定した。

それによると日本の出場する予選リーグＢ組は本誌既報のとおりチェコ（前回優勝国）、ユーゴ対スペインの勝者、アメリカ対カナダの勝者とともにフランス東南部の４都市で行われ、日本の対戦スケジュールは次のようになる。

▽第１戦　チェコ▽第２戦　ユーゴ対スペインの勝者▽第３戦　アメリカ対カナダの勝者

Ｂ組で１位又は２位になればメエイン・ラウンド（決勝トーナメント）に進出できる。１位ならばＤ組２位が、２位ならばＤ組１位が１回戦（準々決勝）の対戦相手となる。

なお、予選リーグ各組３位国によって９～12位決定トーナメントが、各組４位国によって13～16位決定トーナメントが行われる予定

（注）ユーゴ対スペイン、アメリカ対カナダの予選は11月15日と29日（２回戦制・ホームアンドアウエン）に予定されている。

全中四国学連が連勝
対全九州学連選抜

第２回西部日本学生選抜対抗全中四国学連―全九州学連戦は６月13日広島商大で行われ、１点を争う好試合を演じた末全中四国学連が昨年につづき勝利をおさめた。

全中四国学連選抜 12（8―7、4―3）10 全九州学連選抜

得	【中四国選抜】		【九州選抜】	得
0	岡本（松山商大）	GK	坂元（九州産大）	0
0	水戸（山口大）	FP	宮内（九州産大）	1
0	木村（広島大）		都地（九州産大）	0
1	阿波（松島商大）		渕上（九州産大）	2
3	木原（山山商大）		安部（西南学院）	1
2	中野（近口大）	（審・上田 山本）	小島（西南学院）	3
1	乗金（広大）		山田（西南学院）	1
2	中岡（広島商大）		垣花（鹿児島大）	0
1	岡本（広島大）		野村（　）	0
1	杉岡（　）		島村（　）	0
1	堺（広大福山）		宮本（九州産大）	2
12	（1）	7MT	（0）	10

▼第24回関学―早稲田定期戦（６月20日・大阪市立中央体育館）

関学 22（10―7、12―7）14 早稲田

通算成績は関学の15勝９敗

▼第22回京大―慶応定期戦（６月28日・慶大日吉）

慶応 20（10―7、10―7）14 京大

通算成績は慶応の15勝５敗２分

▼第19回京大―東大定期戦（６月29日・東大御殿下）

京大 20（15―6、5―8）14 東大

通算成績は京大の17勝２敗

▼第16回甲南―慶応定期戦（７月５日・横浜文化体育館）

甲南 25（―　―）19 慶応

通算成績は慶応の13勝３敗

東北学院大が初優勝

第20回東北地区学生総合体育大会ハンドボール競技は６月28、29の両日秋田市に10大学が参加して開かれた。

その結果、東北学院が準々決勝で春の東北北海道学生１位の東北大を降した余勢をかって、決勝では進境いちぢるしい仙台大と第２延長にもつれこむ激戦の末降して優勝を飾った。

▽１回戦

東北学院　不戦勝　日大工学部

岩手大 16―15 宮城教大

▽準々決勝

東北学院 17―14 東北大

秋田大 21―17 弘前大

福島大 29―19 山形大

仙台大 21―13 岩手大

▽準決勝

東北学院 31（18―4、13―4）8 秋田大

仙台大 24（12―11、12―9）20 福島大

▽３位決定戦

福島大 33（16―5、17―4）9 秋田大

▽決勝

東北学院 27（2―1、1―1：2―1、0―1：14―12、8―10）26 仙台大

全日本学生選手権の要項発表

全日本学生連盟では11月26日から30日まで東京で開く今年の全日本学生選手権の大会要項を発表した。

それによると、男女とも全日程を駒沢屋内球技場と駒沢体育館を使用して室内で行うことになったのが注目される。

参加申し込み〆切日は９月15日で全日本学連（東京都渋谷区神南町25）あて２通の申込書と参加料一チーム五千円を添えて手続きすることとなっている。

組み合せ抽せんは９月20日東京で行われるが、競技方式は男子はトーナメント、女子は参加校が少い場合は総当り（リーグ戦）の予定

全日本選手権検討委が発足

日本協会では懸案の全日本選手権の開催期日などを検討する小委員会を発足させることになり、若崎技術部長（常務理事）を委員長と決め、７月中に第１回会合を開き、10月の全国評議員会・理事会までに委員会案をまとめることになった。委員には若崎委員長のほか安藤（審判部長）、岡村（総務部長）両常務理事、学連・実連・高体連・教職連各代表１名、村田選手強化対策委員長の計８名とオブザーバーとして学識経験者数名を委嘱する予定。

有力な東西の学生勢　男子

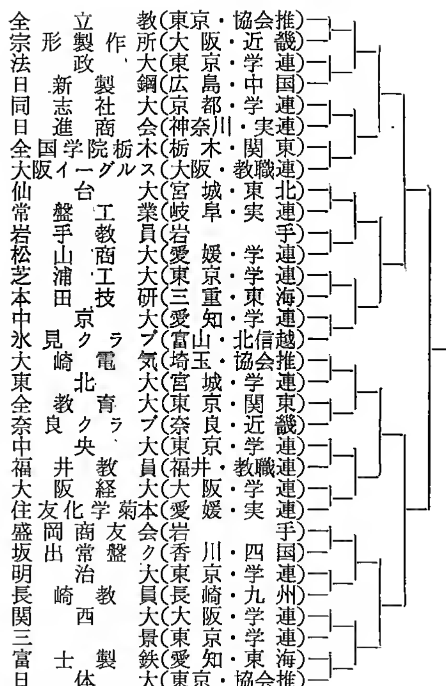
～9日から盛岡で全日本総合選手権～

女子大洋、三菱中心に激戦か

今年のチャンピオンチームを決める第21回全日本総合選手権大会は8月9日から13日までの5日間岩手県盛岡市の県営グランドを主会場に、男子32、女子16チームが参加して行われる。
　オリンピック実施の決定で、意気あがる最近の球界の動向を反映して好試合の展開が期待される。

（女子）女子は別表の通り、16チームをA～Dの4組に分け、予選リーグを行ない、それぞれの一位によって、決勝トーナメントが争われる形が例年通りとられることになっている。
　順当に進めば、いわゆる四強によって、決勝トーナメントが争われることになろう。
　大崎電気（埼玉）、田村紡（三重）は大巾にメンバーが入れかわっている。両チームとも昨年若手として活躍していた三毛、若林、渡辺（信）（以上田村紡）木幡、三浦、栗村（以上大崎）らが主力となっている。戦力としては未知数の魅力はあるが田村紡の種村、小林、水谷、大崎の早川、鈴木、加藤、川崎らベテラン陣の抜けた穴は大きい。
　これに比べると大洋デパート（熊本）、三菱鉛筆（神奈川）は昨年のメンバーがほとんど残っているので、この両者の争いと見るのが順当なところだろう。
　大洋は新保、射場が退いたが、昨年三冠をなしとげた主力メンバー垂水、枝尾、渡辺、米、GK小原らが健在でやはり優勝へ一番の近道というところにあろう。
　三菱はかなりの数の選手が替ったが、蓮見、鈴木、江川、小田島姫野、GK吉田はそのままであり後進の成長もあってチーム力はむしろ向上している。順当に進めばこの両者が当る準決勝が事実上の決勝戦になろう。
　予選A組では、昨年来、ほとんどメンバーの変動がなく、着実に力を伸ばしてきている東京重機（東京）がGK川本、山本、滝口、鷺谷らのメンバーでどのように大洋に挑戦するかが焦点となろう。また学生界では向うところ敵のない日体大（東京）がその面目にかけて、津熊、沢谷、木村らを中心にどこまでやるかも興味のもたれる点である。
　B組はGK川崎、早川、鈴木加藤（井）、黒川ら大崎OGで構成されている美和クラブ（東京）がどのような戦いぶりを示すか興味深い。練習量が十分にもてていればナショナルチームに名をつらねたことのある好選手、ベテラン揃いだけに、選手が若い田村紡相手に一波乱ある可能性があろう。
　C組では、石井、原の若手日体大OGを柱に編成されている全長崎、安田、砂浜、森の攻撃トリオを有している中京大（愛知）、GK・松本、木幡、日下、池沼、伊賀が主力の東北宗形製作所（福島）がいかに大崎の堅城に迫るかが問題となろう。
　D組では、東京重機とともに四強の一角を崩そうと強化に力を入れているブラザー工業（愛知）が三菱にとってはうるさい相手になろう。昨年の五十嵐、朝倉、家田の三人を主力に皆川らの元愛知紡組、浜島（名女商）らの新人を加えたうえに、進境いちぢるしかった元大崎電気の中野を加え、チーム力はぐっと厚みを増し、三菱も油断できない力をたくわえている
　また全岩手は来年の国体に備え強化を図っているチーム。岩手県出身で東女体大に籍を置いている熊谷、中島、川井、関らに花巻農、岩手女高の若手OGを加えて、来年を期しており、今回も地元だけにダークホース視してよい。
　この他、A組に宮城二女高（宮城）、B組に岩手女高（岩手）と二

○……男　子……○



全立教（東京・協会推）
宗形製作所（大阪・近畿）
法政大（東京・学連）
日新製鋼（広島・中国）
同志社大（京都・学連）
日進商会（神奈川・実連）
全国学院栃木（栃木・関東）
大阪イーグルス（大阪・教職連）
仙台大（宮城・東北）
常盤工業（岐阜・実連）
岩手教員（岩手）
松山商大（愛媛・学連）
芝浦工大（東京・学連）
本田技研（三重・東海）
中京大（愛知・学連）
氷見クラブ（富山・北信越）
大崎電気（埼玉・協会推）
東北大（宮城・学連）
全教育大（東京・関東）
奈良クラブ（奈良・近畿）
中央大（東京・学連）
福井教員（福井・教職連）
大阪経大（大阪・学連）
住友化学菊本（愛媛・実連）
盛岡商友会（岩手）
坂出常盤ク（香川・四国）
明治大（東京・学連）
長崎教員（長崎・九州）
関西大（大阪・学連）
三景（東京・学連）
富士製鉄（愛知・東海）
日体大（東京・協会推）

○……女　子……○

▼予選リーグA組

大洋デパート（熊本）・日体大（東京）
宮城二女高（宮城）・東京重機工業（東京）

▽同B組

田村紡（三重）・日女体大（東京）
岩手女高（岩手）・美和ク（東京）

▽同C組

大崎電気（埼玉）・中京大（愛知）
東北宗形製作所（福島）・全長崎（長崎）

▽同D組

三菱鉛筆（神奈川）・大阪体大（大阪）
全岩手（岩手）・ブラザー工業（愛知）

▼決勝トーナメント組み合せ

A組1位
D組1位
B組1位
C組1位

（女子決勝は8月13日16時―17時にNHK教育TVで全国中継の予定）

高校チーム、B組に日女体大（東京）、D組に大阪体大（大阪）の二大学チームが出場するが、いずれも強豪にはさまれて苦しい。これらチームの健斗を期待したい。

【藤本　強】

攻撃力のいい日体大

（男子）本来なら大崎電気（埼玉）を優勝候補の一番手にあげるところだが、日本協会の規定で近森、飯田、東、平岡、近藤、井上、竹野GK下里、福本ら全日本A（ルーマニア遠征メンバー）に選ばれているレギュラー9人が出場できず、今年も学生勢を中心とした争覇戦になろう。

なかでも日体大、中央大、芝浦工大（いずれも東京）の関東勢と関西大（大阪）それに全立教、全教大（ともに東京）の6チームは有力視される。日体大を推す声は特に強い。

GK本田と藤中を全日本に送っているが井上、谷藤、斎藤らの全日本強化選手（全日本B）を軸に氷海、松原、笠原らの攻撃力は強さと巧さを持っている。日体系の手からこの大会のタイトルがはなれて11年にもなり、ぜひとも今年は優勝を飾りたいところだ。不安は韓国遠征（7月20日帰国）による疲れだけといってもよい。

2連勝を狙う全立教は現役勢で出場。優勝メンバーから木野、野田（ともに全日本A）、北村、GK川口（ともに全日本B）らが抜けたうえエース有永（全日本A）も欠ける。しかし小野口（全日本B）、加藤、戸田、倉前、古谷ら巧者の粘りのある攻守は定評があり、タイトルを守ろうという意気も手伝って、トップチームにふさわしい試合をみせるだろう。

中央大と芝浦工大は選手の粒が揃い優勝を望める実力を持つ。

中央大は植木（全日本B）、喜田、佐藤要、佐藤光、花輪らの攻撃力がいい。芝浦工大も高鍬をリードマンに森、新実、明石の全日本Bトリオそれに木全、大江ら若さにあふれている。オフエンスの力は高いが守りのもろさが気がかり。中央大は順当なら準々決勝で全教大（東京）、芝浦工大は2回戦で中京大(愛知)と顔を合はせるがここがひとつの難関。

全教大はGK上野、浅野、斎藤梁川ら現役勢に大西、小山、稲垣らの若手OBが加わりスケールの大きい布陣。2回戦の大崎電気は西村（全日本B）、籏野、太田らの留守軍だけに、やはり中央大戦が問題だろう。

中京大はテクニシャン鈴木、吉田らスピーディなフオーメーションプレーに特色がある。

韓国遠征選考大会で日体大と互角に試合を進めた関西大はセットからの変化攻撃が多彩で馬着をリーダーに許、松田、西脇、宮松らが持ち味を発揮すればダークホースとなろう。1回戦三景（東京）2回戦日体大というクジ運だけにいつそうそれがいえる。

学生への対抗勢力のなかでは大阪イーグルス（大阪）、常盤工業（岐阜）、岩手教員（岩手）、住友化学菊本（愛媛）、富士製鉄（愛知）それに三景（東京）らが買える。

なかでも大阪イーグルスは福井（全日本B）、樫塚、東、松尾、青木、GK島崎らで試合運びの巧さは伝統的。同じグループの全立教にとっても無気味な存在だろう実業団の各チームはそれぞれ個性がある。

東海ナンバー・ワンの座を不動のものにしている常盤工業は山田高橋、GK渡辺ら、住友化学菊本は加藤（全日本B）をエースに白石、GK季原らをそれぞれ攻守の中心にもっている。

三景は江名、GK尾形（ともに全日本B）榊、内藤、高梨と有力選手によってスキがなく関大戦は1回戦屈指の好カード。

地元の期待をになう岩手教員は高田、増田を主力に岩手大の若手OBで固めており、常盤工業戦をどう戦うかが上位進出のポイント。

このほかのチームでは法政大（東京）、同志社大（京都）、日進商会(神奈川)、大阪経大(大阪)、明治大(東京)、宗形製作所(大阪)、長崎教員（長崎）らが一発の力を秘めており特に法政大、同志社大明治大は調子の波をつかめば大きく勝ち進みそうだ。宗形は第1戦に全立教を抽きあて斗志を燃やしている。

進境を伝えられる日新製鋼（広島）と松山商大（愛媛）はともに緒戦がカギ。苦しい条件をぬつて出場のクラブは全国学院栃木（栃木）、氷見ク(富山)、奈良ク(奈良)、盛岡商友会(岩手)、坂出常盤ク(香川）の5チームにすぎぬが健斗を期待したい。

ところでこの大会には全日本A（ルーマニア遠征メンバー）にリストアップされた17選手は参加できないことになっている。

そのため前述のように大崎電気のチーム力はBクラスに落ち、日体大のGK本田、藤中、全立教の有永、同志社大の中井らも出ないそればかりか木野、早川らのワクナガ薬品（大阪）、野田を加えた大同製鋼（愛知）らは予選の段階で出場をあきらめ、北井の率いる埼玉教員ク（埼玉）は教職員連盟の推せんを辞退してしまった。

ヨーロッパ遠征ですっかりたくましさと巧さを増したと伝えられる代表選手のプレーを見られないのはいかにも残念である。

【杉山　茂】

～全日本高校選手権（8月2日～7日・富岡）展望～

下関中央工（前年優勝）めぐる争いか 男子

女子は実力伯仲の激戦必至

炎天下に展開される高校球児の激突――第20回全日本高校選手権（インターハイスクール）は8月2日から7日までの6日間群馬県富岡市の富岡高、富岡西小学校の両球技場に全国各都道府県千余校によるけわしい予選を勝ち抜いた男子52校、女子50校が参加トーナメントで行われる。

今年は高体連が発足して20年目の〝記念大会〟。年々いちぢるしいレベルアップの跡をみせており、特にミュンヘンオリンピック実施の報はいやがうえにも若いプレイヤーを刺激している。

注目の組み合せ抽せんは7月5日富岡市で行われ別表のようになったが、大会審判長嶋田新太郎氏からの資料と各地で集めた情報をもとに展望を試みてみよう。（編集部）

男子 20周年大会を飾るにふさわしく過去の優勝校のうち桐生工（群馬）、清水商（静岡）中京（旧中京商、愛知）、下関中央工（山口）の4校が元気な姿を見せているなかで、名門・桜台高（愛知）と明星高（東京）の名が消えているのはさびしい。

20年前、31都道府県の参加でスタートした本大会も沖縄をふくめた47都道府県（注・青森、鳥取は男子のみ、佐賀は女子のみ）の代表が揃い、しかも各県の予選は年ごとに激しさ、きびしさを増し、一次、二次、三次を経て決勝大会を行うような激戦区も増えた。

それだけに、本大会に勝ち進んで来た初出場15校を含む52校の実力は伯仲しておりわずかな運不運が勝負を左右するような試合がここ数年目立っている。

組み合せにしたがい8つのパートに分けてベスト8への有力候補をまず探り出してみよう。

連ぱに意気ごむ下関中央工

Aパートではやはり前年優勝の下関中央工が焦点だ。優勝メンバーから5人を卒業させたがGK山徳、酒井、古谷、鬼村、西島、西村らが健在。優勝―韓国遠征ですっかりたくましさを加えたうえ、試合運びの巧さにいっそうみがきがかかっている。5月の中国高校でも危気なく優勝を飾っており、『昨年以上のチーム力』という声も聞かれる。しかし博多工（福岡）、添上（奈良）、相模台工（神奈川）らの粘りある攻守は油断がならない。連ぱに意気ごむ下関中央工と強敵打倒に気力をみなぎらせ各校の対戦は、はじめから火花が散りそうである。

ひしめくダークホース

Bパートは同じタイプのチームが並んでいる。加治木工（鹿児島）―函館東（北海道）戦は1回戦屈指の好カード。このほか滝川（兵庫）、塩山商（山梨）、枚方（大阪）らの実力が評判である。

Cパートは福井国体で下関中央工を降した新居浜工（愛媛）、トップゾーン愛知の新星・豊橋商、抬頭いちぢるしい羽水（福井）と鶴崎工（大分）国学院栃木、伝統の天城（岡山）らダークホースが集った。各試合ともまったく予断を許さぬが、豊橋商―新居浜工の勝者が進出とみせたい。

Dパートはホームチーム富岡（群馬）と神代（東京）の争いか。

富岡は伝統のあるチーム。計画的な強化策も充分にあげているようで本拠地の利もあり活躍しそうだ。追うのは古川工（宮城）。

白熱するか中大附―清水商

逆のブロックに目を転じよう。Eパートは強豪がぶつかりあう。

北信越1位の小杉（富山）、名門麻生（茨城）、中京（愛知）、それに初出場・マリスト学園（熊本）の存在も無気味である。

いずれも最上位を望むに足る力を備えており、この4校にからむ三本松（香川）、新宮（和歌山）の力も軽視できまい。

Fパートは岐山（岐阜）―洛星（京都）の勝者と下松工（山口）桐生工（群馬）がリードしているようだ。南会津（福島）も元気。

Gパートは初出場校が多いが、東教大附属坂戸（埼玉）と堺工（大阪）のせりあいになりそう。急速に力をつけている沖縄代表・那覇商の健斗も大いに期待される。

Hパートは、前年の準優勝校・中大附属（東京）をはじめ三原工（広島）、盛岡一（岩手）、清水商（静岡）がひしめく。なかでも東海で抜群の力倆を示した清水商の試合ぶりは注目されるところ。順当ならば3回戦は中大附属と対決しよう。この一戦は優勝争いにも大きく影響してくる試合だ。

さてベスト8はどうなるだろう波乱必至の大会だけにこの予想は極めて難しいが、下関中央工、塩山商、新居浜工または豊橋商、富岡または神代、麻生、洛星、堺工清水商または中大附属とみたい。

このなかから抜け出て栄光を得るものを占うのはさらに至難だ。

高校選手権は〝実力〟だけで総てが決まるというものではない。前述の運不運やコンディショニングもそうだし、大会後半に調子の波にのれるかどうかも一つのカギだ。

強いて優勝最短距離にあるものを選べば、連続制はの夢に燃える下関中央工、地元の期待を一身にうける富岡、2度目の優勝を狙う清水商、宿願に2年つづけて挑む中大附属となるのではなかろうか

入り乱れる強豪、新鋭

女子 古豪、新鋭いり乱れており前年の菊池農（熊本）のようにとび抜けた存在が居ないだけに大混戦の様相を呈そう。

女子の勢力地図も20年間に大きく塗り替えられ、かっての優勝校で今年姿を見せているのは菊池農

熊本市立、静岡城北、栃木女、秋田和洋女、花巻南の6校。操山、青陵の岡山2強をはじめ稲沢、半田の愛知勢、寝屋川（大阪）、明善（福岡）、水海道二（茨城）らが予選で敗退している。初出場は4校。

前年、超高校級の名を欲しいままにし、全日本選抜（12月）で学生1位の日体大まで降した菊池農は優勝メンバーが全員卒業してしまい、荒木監督も転任。連続優勝へ斗志を燃やしているもののかなり苦しい試合を強いられそうだ。

菊池農をふくんだAパートでは室蘭商（北海道）—宮城二女（宮城）の勝者が進みそうだ。高岡女（富山）—深谷女（埼玉）の勝者が菊池農とどのような試合をみせるかも興味深い。

Bパートは栃木女—島原農（長崎）という好カードをはじめ静岡城北、徳山（山口）、甲子園学院（兵庫）など有力校が揃っている。

Cパートは名門と新進の多い今大会のなかでも、もっともその色が強い組だ。

前橋市女（群馬）が地元の利をどこまで活かすか注目されるが、緒戦の相手は高知西（高知）前年のメンバーがほとんど残っており春日丘（大阪）も試合巧者。小平（東京）も洗れんされた攻守を誇り益田（岐阜）、筑紫女（福岡）は上り坂の好チーム。接戦が連続しよう。

Dパートは中国1位・真備（岡山）と東海1位・名古屋女商（愛知）の激突ともに秀れた攻撃力をもつ。小禄（沖縄）の進境も話題となるだろう。

Eパートはダークホースが集結している。山陽女を降して代表となった広島一女を筆頭に北信越1位の小松市女（石川）、2度目の優勝を狙う秋田和洋女。熊本市立—昭和学院（千葉）も注目の一戦で、昭和学院は5月に高校界最高ともいえる57点をマーク、好調だ

Fパートは高蔵女商（愛知）が一応有力とみられるが、精華女（京都）もバランスのとれた攻守を持ち、小諸商（長野）大分東（大分）がこれにつづこう。

Gパートも実力が接近している。高崎市女（群馬）と八郷（茨城）の関東勢が一歩リードしている感じだが三本松（香川）、浜田水産（島根）、竹田女（山形）も力を伸ばして来ている。

Hパートには優勝候補といわれる新居浜市商（愛媛）がいる。新居浜商は前年の準優勝校で、しかも卒業したのは3人。春以来の試合ぶりも安定している。しかし花巻南（岩手）、大谷（大阪）らの力は侮れず自信のスキをつかれぬとは限らない。

ベストエイトは順当ならば菊池農または室蘭商、徳山、筑紫女学園真備または名古屋女商。広島一女または昭和学院高蔵女、八郷新居浜市商あたりになるのではないかこのうちベストフオアで競うのは菊池農—真備、昭和学院—新居浜市商か。ダークホースとして室蘭商、名古屋女商、広島一女の三校をあげたい。

○………男　子………○

- 下関中央工（山口）
- 金工大附属（石川）
- 博多工（福岡）
- 相模台工（神奈川）
- 添上（奈良）
- 四日市工（三重）
- 滝川（兵庫）
- 寒河江（山形）
- 加治木工（鹿児島）
- 函館東（北海道）
- 高知追手前（高知）
- 塩山商（山梨）
- 枚方（大阪）

- 羽水（福井）
- 新居浜工（愛媛）
- 鶴崎工（大分）
- 鰺ヶ沢（青森）
- 国学院栃木（栃木）
- 天城（岡山）
- 豊橋商（愛知）
- 古川工（宮城）
- 富岡（群馬）
- 西都商（宮崎）
- 境港工（鳥取）
- 柏崎工（新潟）
- 神代（東京）

- マリスト学園（熊本）
- 小杉（富山）
- 三本松（香川）
- 新宮（和歌山）
- 中京（愛知）
- 麻生（茨城）
- 岐山（岐阜）
- 洛星（京都）
- 坂城（長野）
- 下松工（山口）
- 南会津（福島）
- 桐生工（群馬）
- 木更津（千葉）

- 徳島東工（徳島）
- 東教大附坂戸（埼玉）
- 佐世保北（長崎）
- 湯沢（秋田）
- 堺工（大阪）
- 那覇商（沖縄）
- 松江工（島根）
- 盛岡一（岩手）
- 清水商（静岡）
- 八幡工（滋賀）
- 三原工（広島）
- 川和（神奈川）
- 中大附属（東京）

※優勝校は8月19日東京（駒沢）で韓国代表校と対戦の予定

○………女　子………○

- 菊池農（熊本）
- 高岡女（富山）
- 深谷女（埼玉）
- 宮城二女（宮城）
- 室蘭女商（北海道）
- 津女（三重）
- 栃木女（栃木）
- 島原農（長崎）
- 静岡城北（静岡）
- 常盤（新潟）
- 甲子園学院（兵庫）
- 神埼農（佐賀）
- 徳山（山口）

- 春日丘（大阪）
- 前橋市女（群馬）
- 高知西（高知）
- 筑紫女学園（福岡）
- 小平（東京）
- 益田（岐阜）
- 真備（岡山）
- 池田（徳島）
- 小禄（沖縄）
- 平塚江南（神奈川）
- 粉河（和歌山）
- 名古屋女商（愛知）

- 広島一女（広島）
- 熊本市立（熊本）
- 昭和学院（千葉）
- 生駒（奈良）
- 和洋女（秋田）
- 小松市女（石川）
- 高蔵女商（愛知）
- 小諸商（長野）
- 精華女子（京都）
- 山梨（山梨）
- 大分東（大分）
- 福島女子（福島）

- 浜田水産（島根）
- 竹田女（山形）
- 高崎市女（群馬）
- 三本松（香川）
- 守山女子（滋賀）
- 都城泉ヶ丘（宮崎）
- 八郷（茨城）
- 福井商（福井）
- 桜水商（東京）
- 大谷（大阪）
- 花巻南（岩手）
- 加治木（鹿児島）
- 新居浜市商（愛媛）

山田理事帰国

7月7日からマドリッドで開かれていた第16回IHF審判講習会に出席していた日本協会・山田計理事は7月19日帰国した。

埼玉、大阪イーグルスを追う東京教員ク

沖縄も初参加　全日本教職員選手権展望

第12回全日本教職員選手権は8月15日から17日までの3日間埼玉県・上尾市体育館に28チームといぅ多数が参加してトーナメントで行われる。沖縄教員の初出場など話題の多い大会となりそうだ。

×　　×

優勝を争う実力があるとみられるのは埼玉（前年優勝）、東京、岐阜、長崎、岩手、大阪イーグルスあたりだろう。順当ならばこのうち長崎―岩手は2回戦、埼玉―東京は準々決勝でぶっかる。

2連勝を狙う埼玉は高田、松田結城の攻撃トリオとGK高橋の堅守は定評があり、新加入の川澄もいいプレーをみせているのだがエース北井をナショナルチームに抜かれ、多勢が退部（留学）したため持ち駒不足だ。

高野、山口、渡辺、大西、GK綿貫（全日本B）といった精鋭を集めて新発足の東京が張り切っているだけに苦しい。この一戦を乗り切れば一気に優勝をれはあてはたすこともできる。東京にもそ果まることだ。

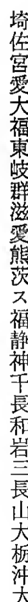
対抗とみられる大阪イーグルスは、福井（全日本B）を軸に樫塚、松尾、東、青木、GK島崎らで相変らず巧妙な試合運びをみせている。

長崎、岩手はともに国体を控えて強化につとめており、その試合ぶりが注目されよう。長崎は大宮黒川の巧技が主戦力。岩手は増田の攻撃力を中心にまとまっている。

岐阜、福井の力も侮れない。特に福井は去年の活躍で自信をつけており小山内、坂野らで波乱を呼ぶ可能性は充分ある。

このほか愛知、熊本、スワロー兵庫、福岡、静岡、大分らが安定した攻守を持ち上位進出を狙っている。遠来の沖縄も強化合宿などを行い意欲的なだけに健斗が期待されよう。なお、初の試みとして1回戦の敗者のなかから希望チームによって「敗者トーナメント（埼玉協会理事長杯争奪）」が行われる。

（杉山）



埼玉教員ク
佐賀教員
宮城教員団
愛知教員
大阪教員ク
福井教員
東京教員ク
岐阜教員
群馬教員
滋賀教員
愛媛教員
熊本教員
茨城教員
スワロー兵庫
福岡教員ク
静岡教員団
神奈川教員団
千葉教員
長崎教員
和歌山教員
岩手教員ク
三重教員団
長野教員
山梨教員ク
大分教員団
栃木教員ク
沖縄教員
大阪イーグルス

勝田施設学校、「海上」勢降し優勝

初の全自衛隊選抜大会開く

その成果が注目された第1回全自衛隊選抜大会は7月11日午前9時から東京・駒沢第二球技場に12チーム（棄権1）が参加して開かれた。

競技は1回戦から決勝まで1日で消化する強行日程だったが、各試合とも、自衛隊におけるハンドボール熱を反映して内容の高い展開を示した。

ベスト・フォアには、3年前から全国大会を開き意欲的な活動をつづけている海上自衛隊関係3チームと、球歴を誇る勝田施設学校（茨城）が勝ち残り、決勝は勝田—鹿屋第一航空群・教育航空群混成（鹿児島）が対戦。攻守に一日の長ある勝田が、後半鹿屋の反撃をかわして快勝、初のチャンピオンチームとなった。

▽1回戦（3試合）

大村航空隊（海上・長崎）26（14-5、12-4）9 百里第七航空団（空・茨城）

朝霞体育学校（埼玉）22（11-6、11-7）13 仙台東北補給処（陸上・宮城）

横須賀通信学校（陸上・神奈川）不戦勝 小月教空群（海上・山口）

▽準々決勝

勝田施設学校（陸上・茨城）16（8-6、8-8）14 大村航空隊

下総第四航空群（海上・千葉）27（14-6、13-10）16 船岡建設隊（陸上・宮城）

宇都宮教空郡（海上・栃木）22（10-5、12-6）11 朝霞体育学校

鹿空第一航空群・教室群混成（海上・鹿児島）20（9-7、11-7）14 横須賀通信学校

▽準決勝

勝田施設学校 18（9-5、3-7、2-0、4-2）14 下総第四航空群

得	【勝田】		【下総】	得
0	関島	GK	石井	0
0	諸田	GK	小森	0
0	平山	FP	木本	3
0	富永	FP	日浦	2
3	阿部	FP	大川	1
5	新山	FP	七ツ石	4
4	増田	FP	横須賀	0
2	日高	FP	飯塚	1
1	小松	FP	保坂	1
1	高原	FP	石島	2
2	押野	FP	鈴木	0
0	山下	FP	中村	0

（審・宮下・安藤）

18（6）7MT（2）14

鹿屋第一航空群・教空群混成 20（10-2、10-4）6 宇都宮教空群

得	【鹿屋】		【宇都宮】	得
0	中園	GK	堀井	0
1	渡久地	FP	石橋	0
3	沢山	FP	片山	0
3	地主	FP	江田	1
0	二川	FP	幸内	0
3	近藤	FP	鈴木	0
10	奥原	FP	佐藤	1
0	後藤	FP	町田	1
0	浜武	FP	稲田	1
0	山口	FP	中一	2
0	中本	FP	吉川	0

（審・佐野・岡村）

20（3）7MT（2）6

▽3位決定戦

宇都宮教空群 19（11-2、8-2）4 下総第四航空群

▽決勝

勝田施設学校 15（8-3、7-8）11 鹿屋第一航空群・教空群混成

○……勝田のスタートは快調で11分までに5—0とリードした。

鹿屋にも得点機はあったのだがシュートミスが多く結局は、この序盤の好不調が勝負につながった。後半、鹿屋はようやくシュートが決まり出し25分には10—13まで追いつめ興味をもたせたが、勝田は27、28分に連続ゴール、勝利を不動にした。敗れたとはいえ前日まで海上の全国大会（宇都宮）に出場、この日も3連戦しながら後半猛追した鹿屋の気力は賞してあまりあろう。

得	【勝田】		【鹿屋】	得
0	関島	GK	山下	0
0	諸田	GK	中園	0
1	平山	FP	渡久地	2
0	富永	FP	沢山	0
2	阿部	FP	地主	1
2	新山	FP	二川	1
1	増田	FP	近藤	4
4	日高	FP	奥原	3
1	小松	FP	後藤	0
1	高原	FP	浜武	0
3	押野	FP	山口	0
0	山下	FP	中本	0

（審・岡村・佐野）

15（3）7MT（2）11

夢でない大発展

▽……自衛隊で全国的なスポーツ大会を開催しようとすると、その企画—準備に最低1年はかかるそうだが、この大会はなんと1ヶ月足らずで一切のお膳立てをしてしまい防衛庁関係者をびっくりさせた。そこに自衛隊ハンドボール関係者のなみなみならぬ情熱を感じとることができる。

その熱意に日本協会や実連がひっぱられて開いた〝全国〟大会ともいえる。

▽……現在、日本協会に登録している自衛隊は15。このほかに30ほどの〝トップ〟チームがあり、準備期間さえあれば40チームは集ったろう、と関係者は惜しむ。

しかし、初大会にはせ参じた各チームはさすがに自衛隊にあって強豪という定評を得ている隊ばかりで、若崎技術部長、田中実連理事長をはじめ日本協会役員も、そのレベルを『予想以上に高い』と賞していた。

▽……開催に骨を折った富永劭一尉（勝田・日本実連理事）は『自衛隊で行っているチームスポーツのなかでいちばん水準が高いのはハンドボールだ。勝田が全日本実業団選手権や各全国大会に出ているのをはじめ、国体の代表になる隊も増えて来た。特に海上自衛隊における普及はめざましい』といっており、西山逸成氏（朝霞体育学校教官、元防衛大ハンドボール部監督）は『基本体育訓練の必須課目になったことで急速に伸びた将来の発展はますます期待できる』と話す。

▽……悩みもある。指導者の不足はなかでも深刻だ。現在リーダー格となっている人で中央に名を知られているのは西山、富永氏のほか森岡薫、長野農夫男、宮下忠憲氏ぐらいのもの。西山氏は『防衛大の卒業生がこの大会を機に活動してくれるようになれば……』と期待している。

自衛隊関係者の夢は、全日本総合・実業団や国体での上位進出と全自衛隊選抜を編成して全日本選抜に出場できるようになることだ。

1回戦から決勝まで一気に消化して疲れもみせぬ各選手の体力と敢斗精神に技術がプラスされたらこの夢は必ず実現するだろう（S）

第1回 紙上討論

クラブチームをめぐる諸問題

本誌が全国の読者から公募した第1回紙上討論・クラブチームをいかに育成するかは7月10日の〆切り日までに7通(ほかに3氏から特別寄稿)の貴重な御意見が寄せられました。

日本ハンドボール界を支える底辺としてのクラブチームに、多くの方が関心を寄せられていることが判り、今回の提言が日本協会の施政に反映されることを大いに期待したいと思います。

なお第2回紙上討論のテーマは追ってお知らせいたします。

各都道府県協会がクラブの運営を

……植田修司

クラブチームが育たないのは、その周辺に、現状ではあまりにも問題が多いからだろう。

グランド(練習及び試合場)、運営費、人集め等々チーム運営の基本的な点ばかりである。

こうした課題に解決策を得られないかぎり、クラブはますますOBやOGの同窓サロンになってしまうだろう。例えば、関東のある大学のOBクラブは、最近ではハンドボールで集るよりも、ゴルフで集ることの方が多くなりつつあるという。

かといって、OBやOGがハンドボールに現役時代のような情熱をまったく無くしてしまったというかといえばそうではない。むしろ「ハンドボールをつづけたいのだが会社にチームがない」とか「誰でも入れるクラブはできないものか」といった声は多いのである。

特に後者は、ハンドボールに限らず日本のスポーツ界の共通テーマなのだが、成果があがっていない。

私は、この問題に各都道府県協会が着手したらよいと思う。

つまり、日本ハンドボール協会の組織である47都道府県協会がそれぞれ〝直営〟のチームを持つのだ。

協会役員の一人がチーム責任者となり、協会の名をもって月1~2回、グランドなり体育館を借りる。そして、試合の相手には、加盟チームの中から学生でも実業団でも高校のOB会でも選べばよい。

こうしたシステムが確立されれば、仮に転勤してもすぐその県の協会チームに入ってハンドボールに親しめることも出来る。

自信があれば「協会チーム」として全日本や国体の予選に出てもよいだろう。

理想はこれが、さらに市協会や町協会単位になることだ。現状ではあるいは、その方が実行しやすいかもしれない。

ヨーロッパ式のクラブに一歩でも近ずくために、県協会直営クラブの実現を提案したい(関東学連理事・慶大OB)

高知県における現状と打開策

……熊沢徹郎

高体連も二十周年の成人式を迎えた今日、高校でハンドボール競技を経験した選手数は全国的にはもちろん、本県においてもかなりの数にのぼるだろう。しかしながら本年度本県で、一般の部で協会に登録したチームはわずか一チーム(十五名)だけである。ここ数年来最低の状態である。ところが県内を見渡してみると登録外に七つぐらいのグループ活動がみられる。さらにグループは増える傾向さへある。このグループは各校OB連中が定期的にハンドボールを楽しんでいるもので、後輩の指導を兼ねたOBの集りが、これからの高校生に刺激を与えていることを考えるとき、本県におけるクラブの指導的役割を無視することはできない。ともあれ本県においてハンドボールは普及発展の方向に進んでいるものと解釈してさしつかえなかろう。さて問題はそのようなグループが何故クラブチームとして協会に登録をしないのか、或はしなくなったのだろうか、と言うことである。諸々の理由があろうが私としては次の三点がもっとも大きな理由としてあげられるように思う。㈠選手(高校卒)の県外流出、㈡全国大会特に国体出場の機会が薄くなった。㈢登録料が高い(中央への加盟分担金の割当分も含まれる)。国体出場をめざすには県選抜の勝つためのチームを作る必要があるが、OB中心の所謂クラブチームと別に県の選抜チームを作るとなるとかえってOBクラブチームを分裂さすような傾向が生まれる。その上選抜チームとなると二重の登録料を収めなければならない。それでも選抜された単独チームが生まれればよいがOB意識の強い中では現在の所可能性が薄い。といって、一校OBのクラブでは、なかなか代表権を獲得することがむつかしい。そうなると自然と、高い登録料を出してでもと言う気持がうすれる。個人の割り勘で登録料を集めれば安いものではないかと言われようが実際払う身になればそうもいかない。全国大会出場の目標がなければ尚の事登録料が高く感じる。機関誌は後輩のものを読めばまにあうし、試合もOB同志で又後輩との練習試合で結構楽しめる。そういった試合を協会が禁止させることは出来ない。㈠~㈢の理由は相互に関連づけられているようである。登録外の同好会的存在のチームを協会に所属させハンドボール競技を普及させることが地方の協会を預る者の努めでもあるがその打開策として関係クラブのチーム育成への情熱をお願いすると共に日本ハンドボール協会にも次の事を検討してもらいたい。

㈠国体出場については、四年或は五年に一回はブロック県単位の代表制をとる。㈡国体にクラブの部をもうける。㈢国体等に年令別部門をもうける。㈣高校生を含めた地区(例えば四国地区)のクラブ対抗を積極的に進める。㈠~㈡は競技者(クラブ員)に夢をもたすことにあり、㈢は勝敗を別にして楽しめるハンドボールにすることである。今の審判判定では反則

が当然であるような錯覚を起させる荒い面が見られる。つまりルール解釈上の問題点がある。老人？にも手軽に競技が出来るよう又見る者からわかりやすい競技として親まれるように努力することが必要であろう。㈣はＯＢと高校生との結びつきを強化することによりクラブチームの育成をはかることを目的とするのである。

ようするに登録料が実質的に安くなる方法として、同好会的なクラブチームにもなにかの目標をもたし、又その目標に対し可能性を与えてやる事、より多くの者が楽しめる競技としてのハンドボールにする事が出来れば自然とクラブチームの登録も増加するのではないだろうか。実業国チームが多くなった今日、強くなるだけがクラブチームの使命でもなかろう。ハンドボールの底辺拡大に努力しいつまでも競技に親しむ連中の憩の場にすることもこれからのクラブチームの進む一つの道ではないだろうか。全国のクラブチーム諸氏に明日への希望を又日本ハンドボール協会には暖かい御配慮を最後にお願いしておく。（高知協会常務理事、土佐高ＯＢ）

登録料を２段階に

……河村　浩

クラブチームが年々減少していることは、若い世代の〝現代性〟も原因しているが、日本協会の登録システムにも問題があると思う。

例えば、現行では一般男子は年間二千三百円と人数分の百円倍を日本協会へ納め、さらに地方協会へも規定額をおさめなければならない。それで、全国大会にでも出られるならともかく、ほとんどその道は閉ざされている。わずか年間1～2試合のためにそれだけ払うのならいっそ登録をやめてしまおうということになるのもムリはない話である。

そこで、この機に提案したい。日本協会の登録をA登録とB登録に分けるのだ。A登録は現行どおりとし、B登録は、基本金千円のみにおさえそれを日本協会 六百円。地方協会四百円にさらに分配する。機関誌の購読は「希望チーム」にする。B登録のチームはただし、国体を除いては県大会以上の大会には出られないとするのだ。県大会やブロック大会が全国大会予選を兼ねている場合例え優勝しても代表権を得られないとするのは表面上酷だが、その程度の差別はしかたがない。

クラブチームが減少することは球界財政の危機にもつながるわけだろうから、それを防ぐためにはクラブの負担を軽くするという〝誘い水〟も必要なのである。

全国にいま高校チームが一千校あるそうだが、その八割はＯＢチームを作り得るとみてよい。しかし日本協会へ登録しているチームとなるとおそらくその半数にも満たないのではないか。

これだけの〝人資源〟〝財源〟を放置しておくのはもったいないことではないか。

クラブ育成というテーマのみでその実態調査を日本協会があまり行っていないように見うけれるのも非難されてよいのではないか

（神戸市存住）

国体の規制、クラブ大会の推進など

……荒井　豊

クラブチームの意欲をなくしているのは、全日本、国体にまったく進出の道がなくなって来ていることにあるだろう。

クラブ再興の打開はこの一点を考りようすることによって大きな解決をみることができると思う。

全日本は当然のことながら、日本代表するチームを決定するのであるから弱いクラブに用はないのもしかたはないが、国体は社会人の祭典だ。一般男子の部の中にクラブ部門を設けてはどうか。

あるいは、単独チームの国体出場を規制するのも一法だと思う。

またクラブの全国タイトルを設けて欲しい。全日本クラブ選手権はとても事情が許さない（クラブ側の……）ので、せめて東地区、中地区、西地区ぐらいに分けてその3代表によってクラブチャンピオン決定リーグというのは夢か。出場チームに金銭的補助を与えるという考えはますます夢であろうか

（大阪府在住）

山本陽司

機関誌によって知ったことだが体協（あるいは国？）から交附されているスポーツ振興金60万円を六つの全日本選手権に分配しているくらいなら、これをクラブの育成に日本協会は使うべきだと思う。

この金額で全国的なクラブ大会が開けるとは思わぬが、クラブ育成のあい路となっているのはやはり財源であり、これを基金にクラブのための企画を推進して下さい。

現実からすれば、クラブの全国大会を開いたとしても、それへ参加できるのは限られた数であろう。

クラブの活動範囲としてはブロックが精いっぱいなのである。具体的にいえば一泊二日が限界だ。

地方協会の動きをみていると、頂点強化にばかり力を注ぎクラブについては関心を示すだけで積極的にその育成を考えてはいないのではないか。

日本協会が音頭をとって、各ブロック毎にクラブ大会を開くよう指示し、その活動、運営資金としてスポーツ振興資金60万円があてられることを望みたい。なにごともトップレベル中心主義、中央中心主義であって、底辺のチームは入場券の売り捌き機関だと考えているような姿勢は反省して欲しい

（東京都在住）

白石喜一郎

クラブチームの育成のために次の提案をしたい。

一、純粋なクラブチームは日本協会には名義登録のみとして、登録料は地方協会分だけとする。

一、実業団、学生の出られない大会を企画する。当分の間、国体をその代行とする。

一、各地区の学連は年1回ＯＢ大会を開くようにする。

一、クラブ関係者を最低1人は地方協会の役員(理事)とするように日本協会が各地方協会に指令する。クラブの横のつながりが生まれ（対他県）縦のつながり（対同県内のクラブ）が強化される。

一、実業団（会社）チームに、その会社の社員以外の者でも参加できることを研究する。

一、県や市で総合大会を開く場合、1回戦の敗者による試合（敗者復活戦又は慰安試合）を行うことを慣例化する。（東京都在住）

愛知クラブ連盟の現況と問題点

……太田耕治

当連盟の現況 ㈠ 当連盟は、昭和四一年、名古屋市付近に基礎を置く六クラブで発足、現在一四チームとなり、更に数チームの加盟が予定されている。この他県下には、豊橋市を中心とする約六チームより成る団体もある。又県下には両団体に加入していないクラブが二、三ある。

㈠ 当連盟の参加資格は、年二回のリーグ戦に参加することである

㈠ 当連盟の主たる行事は、年三回のリーグ戦であり、各リーグ戦は、それぞれ全日本綜合、国体、東海室内への予選の意味をもっている。

リーグ戦は、一四チームを、一部六チーム、二部八チームに分け、一部総当り、二部変則総当り、合計三一試合の形式をとり、金山体育館を使用し、ウイークデーの午後六時より九時迄に各三試合を行うのである。審判は各クラブから出し、時折県協会の指導を仰いでいる。経費は、一リーグ戦につき体育館使用料として約五万五千円を要し、各チーム四千円宛負担している。

㈠ 一四チームの内訳は、大学OBチーム三、高校OBチーム一〇中学OBチーム一である。中学OBチームは地区の集合体であり、クラブチームとして非常に好ましいので、この種チームの増加が希望されている。

チームの実力については、一部リーグ中、中京クラブ、桜丘会等東海地方屈指の実力を有しており、他面二部リーグはハンドボールを楽しもうとするチームであり、極めて好ましい構成となっている。

当連盟における問題点 ㈠ 県内のクラブ組織が未成熟であること。

既述のように、県内のクラブは、当連盟、豊橋協会、いずれにも加盟しないものの三者に分れている従って、クラブチーム全体の問題について協議が不十分であり、他面全国大会の予選についてその都度話合いを持たなければならないことになる。従って、なるべく早く県内のクラブを一丸にした組織を作り、その中で、名古屋リーグ豊橋リーグを行い、リーグ戦不参加のチームにも練習試合の機会を与えれるようにしたいと考えている。

㈠ 統制の困難さについて。クラブチームは、社会に分れている人達が試合や練習の機会に集まるもので、その本質上高校、大学実業団に比し、統制がとりにくい。リーグ戦での試合管理、審判等についても、ややもすると責任を果さないチームがあり、一部有志の尽力がなければ円滑な進行を期し難いのが現状である。又選手不足（仕事の関係での欠席による）による試合放棄も悩みの種であるが最近では一リーグ戦で試合放棄は一つ程度となった。その場合試合管理者が即席にチームを作って練習試合を行うなどの処置をとっている。放棄チームに対する制裁も種々事情があって困難なことが多い。

尚当リーグは、主として教職員よりなる愛教クというチームがあり諸先生にいろいろ下働らきをして頂いている現状である。

㈠ 練習と指導者。クラブの活動が試合中心にならないよう、毎月一回程度体育館を借用したいと思っているが、名古屋市には公立の体育館が二つしかなく、殆ど練習が不可能である。又たまに借受けても練習参加者が少く、近い将来新聞紙上に予告する等して、各チームのメンバーが個人として参加し、かつ一般の人達も参加して練習ができるよう考慮中である。それが実現した場合は協会にお願いして、然るべき指導者を派遣して貰う予定である。

㈠クラブチームのあり方と対外試合。伝統的な考え方では、クラブこれスポーツの神ずいであると考えられてきたのであるが、昨今のきびしいスポーツ事情のもとでは、もはやクラブでは強力な実力をもつことは難と思われる。経済的にも時間的にも、又人的にもあい路が多すぎるのが実情である。従って、私個人としては、好きな者がハンドボールを楽しむのがクラブであり、その場所を提供するのが連盟の仕事であると考えている。私の畏友であり実連の理事長である田中氏からは、日頃県下クラブの統一、県大会から東海選手権更に全日本へと発展的に進むよう鞭達を受けているが、未だ一般的に時期尚早の感がある。しかし最近岐阜にもクラブリーグが発足した由、明年中には、当名古屋市に於て東海選手権を行いたいと考えているので、この紙上をお借りして東海の各チームの参加をお願いする次第である。

㈠ 最後にクラブ関係は、その本質上基盤が極めて弱いので、将来日本協会のお力を拝借しなければならないことが多々あると思います。この紙上討論の場を借りまして、よろしくお願申上げます（愛知県クラブリーグ連盟理事長）

× × ×

編集部では読者各位からの寄稿をつのる一方、現在活発な動きを示しているクラブの中から三者（女子1）を選んでその実情を伝えてもらいました。

特別寄稿

大阪スターズの場合

田井稔乃

女子のクラブは近年実業団の急激な拡充にあって、その立ち場はまったく苦しいものがあります。大きな大会に出場しても一般女子の種別なため実業団との力の差が大きく互格に戦えません。練習時間をはじめとして、すべての面で実業団とは比べものにならない条件でやっているのですから、同一の大会で対等に戦うのはどうしても無理です。クラブがもっと増え、クラブのみの全国大会が開かれればといつも思っています。

大阪スターズは43年3月の創立でOG会を持たない高校卒業生以上の人を対象に誰でも入会できます。

練習は月1回を「例会」とし、大会前は日曜と水曜日の夜間に行っています。しかし固定した練習会場がなく、ボールさえも満足に揃っていません。このほか出身校がまちまちなため、連絡がとりにくく、OLがメンバーのため遠征の際に休暇をとりにくいという悩みもあります。

遠征などの経費はすべて自己負担で、このほか年間一定のクラブ費を集めています。

女子のクラブは愛着だけがささ

えですが、各地にOG会が活発に動きはじめることを期待し私たちもいっそうハンドボールへの情熱を燃やしつづけたいと考えています。

（大阪スターズ主将）

特別寄稿

氷見クラブの（富山）場合

桶家　寛

まず最初に現在の氷見クラブはいかにしてクラブ活動を行っているかと云う現況より申上げます。わが氷見クラブは氷見高校ハンドボールクラブのO・Bを主体として組織されています。これは決してO・B以外の人達を入れないと云う事ではなく中学卒やハンドボールをやりたいと思っている同好の人達がいればいつでも仲間になっていただけるだけの心の準備と門はいつでも開いてあります。現在チームから去ったものもおればいまもってハンドボールを続けている人達もいる。このような同好の志の集りでありながらチームには種々の困難な問題がひかえている。

第一に、クラブが活動してゆく上において人の和だけではいかんともしがたいことがある。それは活動資金でありこの調達が非常にむずかしく企業関係や各種団体等のバックアップや援助もないのがクラブチームの現状であり結局は個人々の負担を持ってそのチームの資金としてチーム運営をやってゆかねばならないのであります。

第二に、各種大会の出場においても、個人々の勤務先の許可を得ねば出場出来ない現状である。監督やマネージャーがこれらのことについて気を配ってメンバーの確保に一生懸命になっているのである。第三には練習についても実業団チームや大学クラブと異なって優秀なコーチもいず彼等は独自でお互に局面の打開を話合いながら練習をつんでいるのであり個人々の勤務の時間の関係もあってまとまったメンバーで練習が出来ないので個々の勤務日程を出し合って多数集まれる日を選んでチームの練習日程を組み、最小にして最大の効果のあがる様に努力しているわけです。又チームメンバーの少ない時には、母校や中学の指導育成に力をかして少しでもハンドボール人口の増加を願って努力いたしているわけです。これらいくつかの問題をかかえながらクラブチームが細ぼそと続いてゆくその根強い理由を考えて見ますと、ハンドボール競技そのものに対する愛情ともいわれる感情はかくしきれないものがあると思いますが、もう一つ考えねばならないことは年に唯一回全国民挙げての国民大会に出場出来ると云うことです。この大会は、年間の努力の積み重ねを発表する唯一の機会であり各県、各企業までがその成果を期待してもらえる大会でもあります。

年々各競技についていえることですが、企業スポーツと申しますか、実業団の台頭はめぜましいものがあります。クラブチームがその成果を国体にもとめる理由は、論をまたないところですが、ほとんどを占める実業団チームの中では一回戦か、二回戦位まで進むのがやっという状態である。如何に現代の時流とはいえだんだんとクラブチームの存続が精神的な面で困難な状態になって来ることにこれはなろう。

次に日本ハンドボール界の底辺拡充として大切なクラブチーム、を日本協会は大事にしなくてもいいのかどうか？という疑問がクラブ関係者ならずとも生じてこよう。

国体一般男女に於ける出場資格を検討する必要があるのではないか、ここでアマチュアリズムを問題にしようとは思わぬがが少なくともこの国体を期してクラブチームを全国から参集し、その成果を全国各県民に認めてもらえる状態にしてほしいと云うことです。クラブチームの運命の如何は全国ハンドボール界の底辺拡大に大きな影響を与えるものと考えられ、先にも挙げた様に競技そのものに対する愛情を実践の形ではなくなること自明である。わけても指導者の不足している本競技では中学、高校のチーム造り、チーム強化がだんだんと期待出来なくなることも明らかである。

もし日本協会がハンドボール普及・発展を老えるならばなんらかの形で全国クラブチーム事情を真剣に考えねばならない時期ではなかろうか、ここに強くこの問題に関しての御検討をお願いすると同時に次の2点を提案して結びとしたい。

1、国体における一般の組み合せを実業団チームとクラブチームとに分けてそれぞれのベスト8～4によって再度抽選により名実共の国体の優勝チームの決定この場合には当然各ブロック毎の実業団及びクラブチームの選出チーム数の制限をよぎなくされることになると思う。

2、日本協会でクラブチームの育成と底辺拡充という観点からクラブチームに対する登録金の還元（有効な）方法を考えてもらえぬものか。（氷見ク責任者）

特別寄稿

A・O・K（栃木）の場合

板屋雅彦

当クラブは足利工高のOB会で母校のグランドで毎日曜日約4時間現役と合同練習を行いハンドボールへの愛着を燃やしつづけており、年間の最大目標は国体の出場においている。

クラブの運営費は会（部）員から一ケ月三百円を徴収し、ブロック大会や全国大会などに出場する場合は支援者からの寄附を募って費用にあてている。

しかし、当クラブに限らず全国のクラブチームがそうであるように、運営上の悩みはまことに大きなものがある。

特に、会員の職業がまちまちであるために週一回の練習への集合状態も必しも思わしいものではなく、ムリをすれば各自職場での立ち場に不都合なことがしばしば生じてくる。

また、工業高校という母校の性格上、遠方へ就職する者が多く新入会員の確保が難しいといった問題もおきてくる。

こうした問題点をはねのけながらクラブをつづけているのは、ハンドボールへの情熱ひとすじだからであり、それだけにチームのまとまりというものは抜群であると思う。

われわれのようなクラブのために日本協会がクラブ大会の開備を真けんに検討されることを強く望みたい。

（A・O・K責任者）

連載・ヨーロッパの技術研究(3)

チェコ・国際ハンドボール選手と他競技の選手の身体機能の状況

V. ドラジール, K. コスナール, J. マテジユコーバ, J. ルース, L. バンク

ここでは、ナショナルプレーヤー、チェコのプレーヤーおよびバレーボール、バスケットボールのそれぞれ優秀なプレーヤー20名を集め測定した結果を報告しよう。各選手はこれからシーズンに入ろうとする準備期間に測定した。

年令

男子も女子もチェコのプレーヤーがもっとも年をとっているが、その違いはさしたる意味をもたない。

職業

チェコの場合には肉体労働に従事しているものが多い。この傾向はハンドボールの場合、国際的にも認められる。

これに反し、バレー、バスケットの場合には、肉体労働に従事しているものはきわめて僅かである

練習時間

チェコのハンドボール選手は男女とも練習時間が少い。もちろん練習のよりよい手段でこれを補うことは可能である。

身体機能測定結果

外見的身体

この結果では、チェコの男子選手は脂肪の蓄積の度合（Ｆｅｔｔと表に記載したもの）が大きいということである。国際ハンドボールの選手、また特にバスケットボールの選手はこの年令の標準的な人間の平均（15％）を大きく下まわっている。

女子の場合にはバスケットが標準を（20～25％）大きく下廻っている。あとの三つは大同小異であり、とりたてていうほどのことではない。

脂肪が多いということは単にトレーニングだけの問題でなく、体質にもよるものであろう。

身長はバスケット、バレーの場合には、特に大きいものを選ばねばならない競技の特質によろう。

肺活量はスポーツ選手の場合、男子では60、女子では50が最低限とされている。

機能面

血圧、脈膊は5分間にわたって測定した。

男子では、バレー、バスケット、ナショナル選手、チェコ選手。

女子ではバスケット、バレー、ぐっと離れて、ナショナル選手、チェコ選手になった。

ハンドボール選手の間では、男女ともナショナル・チェコ間にはほとんど差異を認められない。

ハンドボールが非常にハードな競技であることがはっきりしているだけにこの結果は意外であった

ＥＳＧ曲線

同時にＥＳＧ曲線の測定も行った。静止時と作業後すぐに測定した。その結果、特徴的な事が発見された。

男子では、バスケット、バレー、チェコハンドボール、ナショナルハンドボールの順であり、女子では、バスケット、バレー、ずっと離れてハンドボールという形をとった。ハンドボールに関してはチェコ選手もインターナショナル選手も意味のある差は足られない。

心蔵の大きさ

レントゲンで測定した心蔵の大きさを表にした。

男子では、チェコのハンドボール選手が最少で、インターナショナルの選手がkg当り最大であった女子では、バスケットの選手がとびぬけて大きく、ハンドボールの間では、ほとんど差は見られない

要約

我々はチェコ・インターナショナルの選手との間、またバレー、バスケットの選手の間を比較することによって、身体的な条件の違いを見出そうと試みた。

男子について、ハンドボール相互を比較した場合、年令、練習時間、身体鍛練（脂肪の蓄積）の面で、インターナショナルの選手とチェコの選手の差を大きく感じざるを得ない。しかし機能面を見た場合には両者はほとんど差がないただレントゲンによる心蔵だけはかなりの差があるが…

しかし、このようにした場合、ハンドボールと他の二競技の場合には、差の見られるものがかなり

ある。
　一方、女子では、ハンドボール相互の間での差異は男子ほど見られず、むしろほとんど同一といって良いぐらいである。しかし、他競技、特にバスケットボールの選手との間には非常に大きな差がある。
　チェコの選手とインターナショナルの選手の間、また他競技の選手との間に非常に大きな差異があるとは考えられない。
　これをもって、バレー選手の体力がハンドボール選手より上にあるというようなことを云うのは正当ではない。
　これは練習内容と練習方法によるものが主であろう。
　他競技では、通年にわたって、多くの体力作り、特に走りこみを行なっている。それも十分にきびしい内容と方法をもって行なわれている。このことが大きな差を生みだす要因になったのであろう。
　特に女子の場合、ハンドボールの練習内容が問題になってくるのは当然であろう。
　表になっている事柄はある程度努力によって、改善さるべきものが多くある。
　どうしても努力が必要である。冬期における練習に走ることを十分にやりさへすれば、これらの他競技、あるいはインターナショナルな選手の域に追いつくことができよう。
　何よりもオフにしっかりと体作りをすることがいかに肝要なことかこの表は教えてくれている。
（抄訳　藤本　強）

		年令	仕事		1週の	体重	身長	Fett	肺活量	脈はく		血圧		良	ESG曲線			心臓の大きさ	
			精神%	肉体%	練習時間	(kg)	(cm)		㎤/kg	静	動	静	動	%	0	1～3	4～7	㎤	㎤/kg
チェコハンドボール	男	28.0	18	82	4	79.3±7.6	174.0±8.1	18.1	61.7±8.6	61	115	124/80	180/55	45	9	55	36	124.2±24.7	1.60±0.33
	女	25.0	25	75	4～6	62.5±4.4	163.7±4.4	20.7	54.3±9.0	71	144	121/78	158/73	12.5	37.5	62.5	0	106.3±7.6	1.71±0.13
国際ハンドボール	男	24.0	50	50	4～6	73.5±5.2	176.0±5.8	12.3	65.4±8.5	64	114	123/77	176/54	55	20	45	35	134.7±14.5	1.82±0.21
	女	23.3	50	50	4～6	64.8±7.1	166.7±4.3	21.7	50.4±8.8	70	131	116/75	169/54	15	25	75	0	109.9±14.9	1.70±0.19
バレーボール	男	26.2	80	20	7.5～10	80.3±7.8	185.4±6.7	14.0	68.0±7.7	58	106	124/76	164/59	75	5	70	25	135.5±19.1	1.69±0.24
	女	25.0	80	20	6	66.5±5.9	167.6±4.1	20.7	55.4±6.9	63	124	114/74	165/59	50	20	55	25	111.0±11.8	1.68±0.14
バスケットボール	男	24.1	100	0	6	82.4±6.8	186.2±9.6	10.6	66.4±8.3	66	116	26/76	176/58	60	10	40	50	147.5±19.2	1.79±0.21
	女	22.5	90	10	6～8	67.4±8.0	171.0±6.7	14.2	55.7±6.0	71	127	116/74	157/61	60	10	50	30	122.1±13.8	1.82±0.22

ハンドボールの歩み（第14回）

ギョッピンゲン連覇

ヨーロッパカップ編④

男子第4回ヨーロッパ杯は1961年～1962年に開かれている。1960～1961年の大会は世界選手権が開かれたので行なわれていない。

前回の参加15チームから、この大会は参加チームが大巾に増え、20チームが参加している。しかしハンガリーのスパルクタス・ブダペストは棄権したので、実際の参加は19チームであった。初参加はモロッコ、ソ連、東ドイツの諸国であり、スペインが復活した。

まず予選の三試合が行なわれた

グラノラース・バルセロナ（スペイン）	28－13	スタデ・モロケーン（モロッコ）
ニロス・アムステルダム（オランダ）	27－10	S・C・アルゼッテン（ルクセンブルグ）
ヴルベスト・キエフ（ソ連）	26－11	アーセナール・ヘルシンキ（フィンランド）

一回戦

FA・ギョッピンゲン（西ドイツ）	34－7	フレマール・ブラッセル（ベルギー）
パルチザン・ブジエロバール（ユーゴー）	33－21	ATRV・リンツ（オーストリア）
ジョワンビル・パリ（フランス）	19－9	グラノラース・バルセロナ
DHfK・ライプチッヒ（東独）	9－7	ディナモ・ブカレスト（ルーマニア）
デュクラ・プラーグ（チェコ）	39－16	WKS・ブレスロー（ポーランド）
BSV・ベルン（スイス）	24－17	ニロス・アムステルダム
VIF・ヘルシンボルグ（スウェーデン）	27－19	ヴルベスト・キエフ
アールフスGF（デンマーク）	22－16	ノルドスタンド・オスロー（ノルウェー）

予想通り、強者が準々決勝に進んだが、ディナモ・ブカレストが新顔のDHfK、ライプチッヒに一敗しているのが注目される。比較的近い国々同士の対戦が行なわれている。ディナモとDHfKの対戦を除いてはいずれも大差で勝負が決っている。

準々決勝

FA・ギョッピンゲン	11－8	ジョワンビル・パリ
パルチザン・ブジエロバール	18－10	BSV・ベルン
デュクラ・プラーグ	19－18	DHfK・ライプチッヒ
アールフスGF	21－19	VIF・ヘルシンボルグ

ディナモを破り、準々決勝に進出したDHfK・ライプチッヒはデュクラ・プラーグに1点差で破れ準決勝に進出することはできなかったが、そのチーム力の充実さは今後を大いに期待させた。スウェーデン－デンマークも7人制の古豪同士の争いで、前回も準々決勝で顔が合い、一点差の好試合、今回も互にゆずらぬ好試合となったが僅かにアールフスが優り、準決勝に進んだ。

準決勝は西欧圏2、東欧圏2の対戦となった。

FA・ギョッピンゲン	13－8	デュクラ・プラーグ
パルチザン・ブジエロバール	14－13	アールフス・GF

ギョッピンゲンはデュクラに快勝したが、ブジュロバールとアールフスは接戦、互にゆずらぬシーソーゲームを展開し、11－11の同点で第一延長に入ったが、これがおわっても、まだ同点、結局第二延長にもつれこみ、一点を多くもぎとったパルチザン・ブジエロバールが決勝に進出した。前回は一回戦にデュクラに大差で破れたユーゴーのチームが今回は良く成長し、ついに決勝に進出を果したことは特筆すべきことであろう、東欧圏に強チームは続出しはじめた傾向をこのヨーロッパ杯の中からも読みとることができよう。

決勝　1962年4月7日パリ

FA・ギョッピングン	13－11	パルチザン・ブジエロバール

結局、FA・ギョッピンゲンが連覇したが、チーム力の差はぐっと縮まっている。一回戦方式であったのでその日の好不調が大きくゲームに作用した。ギョッピンゲン、ブジェロバール、アールフス、デュクラ・プラーグ、VIF・ヘルジングボルグ、DHfK・ライプチッヒ、ディナモ・ブカレストの差はほとんどなく、この7チームがこの時期の本当の意味のトップチームと云えよう。

東欧圏の躍進ぶりがめだってきており、特にチェコ、ルーマニア、ユーゴー、東ドイツがきわだって力をたくわえてきている。

本書は昨年12月にドイツのボール書店によって、発行されたものであり、総頁は96頁、多くの写真が盛りこまれたものである。

本の表題は「国際ハンドボール──技術と戦術・IHFの写真集」という形をとっている著者はIHFの競技委員長を1946年以来勤めているスイスのエミール・ホルル氏、写真はスポーツ写真というよりもハンドボールの写真の専門家、西ドイツのハンス・アップフェル氏によるものである。

順を追って、紹介していこうまず最初にIHFの歴史、現在の状況、競技の概要などが略述される。次にハンドボールとはいかにすぐれた競技なのかということが、心身組織の全体的な鍛練ができるということを中心に述べられている。

ハンドボールの種類の違いが室内・屋外7人制、屋外11人制にわけて説かれる。その後に、攻守の方法が写真をおりこみながら略述されている。

その後に、本書の中でルール上から云って最重要と思われる現在のルールの問題点が述べられている。ここに提示されている問題点は最近の国際審判員講習会などで度々討論されている問題であり、公式見解はルールブックに原註という形で示されている。

それは次のようなものである。

1)、三歩のルールについて、空中でキャッチした場合について述べている。

2)、相手からボールをとる時について、相手に触れずに、いかにボールをカットするか、技術が洗練されねばならないことを説いている。

3)、ブロックについて、体でたちふさがること、これも技術の洗練がいかに必要であるかを説いている

4)、7mスローについて、ディフェンスの反則をシュートの成否を見てから厳しくとれとしている。

5)、ストーリングについて、これも問題があるが、レフェリーは、フェア・プレーと正義によって判断しろとしている。

以上の問題点は現行の我が国のルールと変るところはない。この中で、ホルル氏は選手には技術を洗練することた。レフェリーには選手の技術、チームの戦術を最大限に生かせるようなジャッヂをするように強調している。ここまでは、写真はときたま折りこまれる程度であるが、この後は各頁すべてが写真集という形をとる。

新刊紹介

国際ハンドボール

──技術と戦術・IHF写真集──

エミール・ホルル著
ハンス・アップフェル写真

まず技術の項では、ドリブルがとりあげられ、ソ連、ドイツの選手の写真を例にとつて解説がなされている。次にパス、ここではトリックパスが試合中のスナップによって説明されている。バックハンドパス、フェイントパスそれに続くブロックプレーが示されている。次にパスフェイントが説かれる。ここではボールの魔術師エディ・ステプラー（スイス）が登場する。彼の定評あるフェイント・パスが利用されて、説明がなされている、またいくつかの試合場面の中のパスも登場する。

ついでシュートとキーパーの動きが各国のトッププレーヤーのフォームで例示されている。FPでは、ミョーライゼン（西ドイツ）、リス（ルーマニア）、シュミット(西ドイツ)、グルイア（ルーマニア）などが登場する。

次がディフェンスになり、試合場面におけるディフェンスの個人技術が図示される。その後にゴールキーパーの側から捕えられたシュートがゴールキーパーとして図示される。

その後がルールに違反しないカットと7mスローになるような反則が試合場面でとらえられ、ついで退場の場面が登場する。その後は各国選手の7mスローのフォームが図示されている。ここにはステプラー、ワルダー（スイス）、エリクスン（スウェーデン）、コズメール（西ドイツ）が登場する。

この後はコンビネーションプレーが図示される。まずフリースロー、ついて守備陣形（3：3、5：1、4：2）、ついでポストへのパス、反撃速攻、ブロック、マンツウマンと続き、すべて試合場面に於けるスナップである。多くの有名選手、有名レフェリーが登場する。

次の項は有名ゴールキーパーとしてマトリン（スウェーデン）、ヴィチャ（チェコ）、ホルスト(デンマーク）が登場し、有名フィールドプレーヤーとして、ハブリク（チェコ）、ティーデマン（東ドイツ）、モーゼル（ルーマニア）、リヨーブキング（西ドイツ）、マレス（チェコ）が登場する。

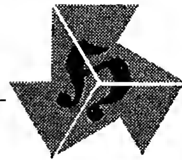
この後には、女子のハンドボールがかなりの紙数を使い紹介されジニテア、少年、幼年のハンドボールと続く。最後に11人制ハンドボールの写真があり、筆者と撮影者紹介があって、おわっている。

ざつと見てきたが、この本の良さは文章では書き表わせない。何と云っても値打は写真である。前半の20頁は文章であるが、あとはすべて写真、しかもトップチーム同士の試合中の写真というのだから、嬉しい。

文章は独仏英の三ヶ国語で書かれており、平易である。オリジナルはドイツ語だが、英仏とも原語にほぼ忠実である。二・三ニュアンスの差、校正ミスなどが英語に見られるのは残念である。三ヶ国語ともきわめて平易であるので、英語なら高等学校の先徒諸君に、独仏語なら、大学で一年間独仏語を学んだ諸君なら十分に読むことができよう。ぜひ一読・一見をおすすめたい。値段は一九〇〇円ぐらいになろう。

(EMIL HORLE, HANSS APFEL "HANDBALL INTERNATIONAL" Pohl-Druckerei und Ver lagsanstalt, Otto Pohle, 31 Celle, West Germany, 1968)

（TS・F）



高体連、20周年迎う（完）

高校ハンドボール界を探っていく時、そこには必ず情熱的な指導者の存在をみつけることができる。

この道ひと筋といってもよいこれらリーダーたちの努力がなければこの20年間をこれほどまでに「充実」で飾ることはできなかったであろう。

特に地方において普及につとめた人たちの力は日本ハンドボール界の礎といってもさしつかえない。

日本協会の組織の中で、高体連関係者の占める位置が圧倒的に大きいのも、そうした背景があるからである。

高校界が斯界をささえるということが、この面でもあてはまる。

ところで、高校界がかかえる課題も少なくはない。

その多くは社会情勢との関連が深く、どのように解決していくかはハンドボール界だけのテーマというわけでもないのだが、高校スポーツ界そのものが、一つの転機に立ちつつあるということは高校界に依存度の強い日本ハンドボール界にとって、やがては深刻な問題になることが充分に予測できるまた高体連と日本協会間の調整といったものも、今後は強められていかねばならぬ問題の一つであろう。

高校界には、〃教育〃という大きな目的があり、一方の日本協会は競技力の向上と普及が主眼である。海外雄飛といった大目標をかかげた斯界が、今後高校界に期待する大きな点は好素材の発掘であろう。現実に、高校選手の身長リストを作成したらどうかといった意見もあり、ジュニアの育成に具体案がねられるのも時間の問題とされている。『力・技・明朗な精神』というモットーの下に、青春を燃やしている高校界と、頂点強化を追う協会施策がかみあうのはなかなか難しい。

こんな話がある。ある高校の一選手が全日本高校優秀選手に選ばれ賞状が送られて来た。と、そのチームの指導者はその賞状をビリビリと破いてしまった。「高校チームで一人だけが選ばれるのは好ましくない。日ごろ、皆で力を合わすということを強調しているのがなんにもならない」というのがその云い分である。

昨年から国体の高校の部は単独校でも混成（選抜）でもよくなった。近い将来、国体が年令別（19才をラインに少年の部と成年の部の二つだけにする）を採用する布石ともいわれているが、それはともかく、この決定を聞いて日本協会関係者は「優秀な人材をスカウトできる」と喜んだのに対し、高体連関係者は「弱いチームの選手にも希望が与えられる」と云っていた。同じような言葉だがそれぞれのニュアンスははっきり異っているのだ。もちろん、高校関係者が、意識して〃教育的〃であるというのではない。優秀なチームを造り、優秀な選手を育てることに情熱を燃やしている人の方がむしろ多いのである。

だが、日本協会が競技力向上―頂点強化に努めれば努めるほど高校界の存在は微妙となって来よう。

日本スポーツ界の大きな流れに学生スポーツがあり、高校スポーツがある時、これはしかたのないことであろう。高校選手にとってそれはまた励みになっているのも事実なのである。

問題は、高校界の周辺がいかに高校スポーツの意義を理解していくかにかかって来る。

昭和25年に発足以来、ハンドボールは体育的効果のあるスポーツとして短時日に急速な発展を遂げた。同時に日本協会も、この期間は普及に全力を注いだ時期なのである。しかし、今後の日本協会の打ち出す施策は、これまでとはおそらくちがった色が濃いものと想像される。

スポーツ少年団の促進、中学指導要領への復活などに普及の焦点があてられるようだと高校界は、競技力向上面での対象となる可能性が強いのだ。

斯界に大きな力と位置を占める高校界と日本協会の調整を説くゆえんだ。

ともあれ20周年を迎えた高体連ハンドボール部。努力と精進と栄光が球史のすべてである。その自信と誇りによってこれからの道を歩んで欲しい。

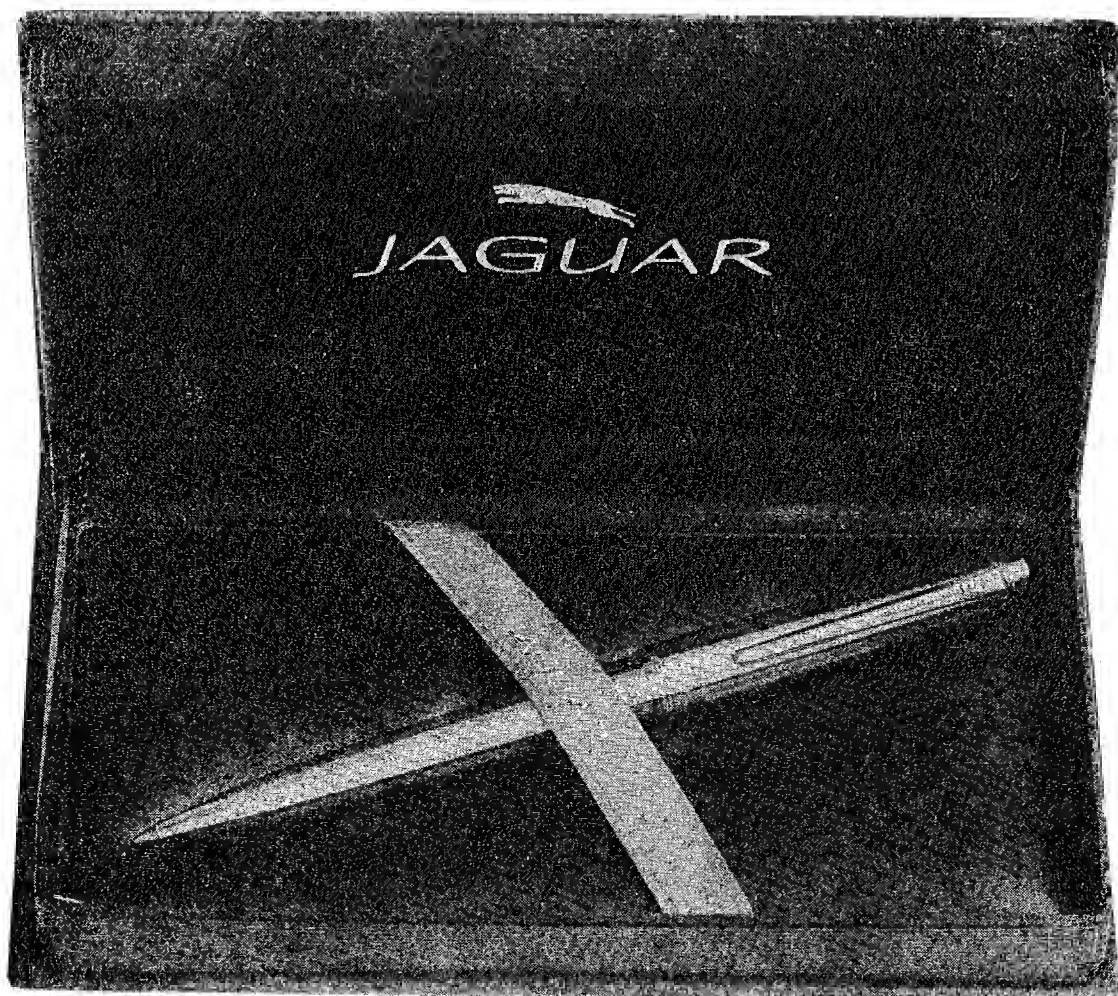
それは、日本ハンドボール界のたくましい前進を意味することにもなるのである。（おわり）

× × ×

5回にわたって連載した「高体連20周年を迎かう」は今月号をもって終わります。筆者の資料不備のため多くの読者に御めいわくをおかけしました。また各位から助言をいただきましたことに御礼申しあげます。なお、第2回（64号）で桜台高（愛知）の公式連勝記録を55としましたところ52ではなかったか、56ではなかったかという二通りの御指摘をうけました調べなおしますと52（昭和26年1月東海大会名古屋予選・対旭ケ丘高戦から12月中部日本大会準決勝・対清水東高戦まで）が正しいと判りました。この場で訂正させていただきます。

全国高体連ハンドボール部 役員名簿（7月1日現在）

▽部長	児玉　九十	（明星高校長）
▽副部長	徳永　陸繁	（東京）
	嶋田新太郎	（富山）
	小袋　是郎	（福岡）
▽常任委員（13名）	石切山捻治	（北海道）
	山崎　金夫	（東北・宮城）
	油井孝一郎	（北信越・長野）
	清水　正	（関東・山梨）
	山田　仁止	（東海・愛知）
	望月伸三郎	（近畿・大阪）
	猪原　昭	（中国・岡山）
	河本　武夫	（四国・愛媛）
	中西　敬一	（九州・福岡）
	—以上ブロック選出—	
	岡前　義春	（東京）
	村田　弘	（大阪）
	永井　勝雄	（東京）
	高橋　英次	（東京）
	—以上推せん—	
▽監査	町田　歳雄	（群馬）
	平田　幸男	（広島）
▽日本協会派遣役員	嶋田新太郎	（副部長）
	清水　正	（常任委員）


JAGUAR

全日本高校選手権 各県予選記録（下）

★太字は代表校

北海道

▼道大会男子予選リーグA組
室蘭清水 14-10 釧路工
函館大谷 8-4 室蘭清水
函館大谷 22-7 釧路工

▽同B組
登別 13-10 札幌商
函館東 25-4 登別
函館東 20-3 札幌商

▽同C組
北見工 不戦勝 駒大岩見沢
室蘭工 不戦勝 駒大岩見沢
北見工 15-14 室蘭工

▽同決勝リーグ
函館東 14-4 函館大谷
北見工 15-10 函館大谷
函館東 15-6 北見工

【順位】①函館東②北見工③函館大谷

▼同女子予選リーグA組
紋別北 9-5 駒大岩見沢
室蘭商 12-3 江差
室蘭商 16-3 紋別北
江差 14-3 駒大岩見沢
江差 7-6 紋別北
室蘭商 7-6 駒大岩見沢

▽同B組
登別 16-5 稚内
室蘭東 10-8 函館東
函館東 18-10 登別
室蘭東 20-1 稚内
函館東 25-3 稚内
室蘭東 20-2 登別

▽同決勝
室蘭商 12-4 室蘭東

東北

▽……秋田県

▼男子決勝リーグ
羽後 26-8 横手
大曲農 9-4 秋田南
湯沢 17-9 大曲
湯沢 17-3 横手
羽後 12-9 大曲農
秋田南 16-15 大曲
湯沢 12-7 羽後
秋田南 23-5 横手
大曲 11(分)11 大曲農
秋田南 10-3 羽後
大曲 31-5 横手
湯沢 14-6 大曲農
大曲 13-6 羽後
大曲農 26-7 横手
湯沢 7-3 秋田南

【順位】①湯沢②秋田南③大曲④大曲農⑤羽後⑥横手

▼女子決勝リーグ
秋田和洋女 13-4 大曲
六郷 14-5 大曲農
大曲農 8-7 大曲
秋田和洋女 8-4 六郷
秋田和洋女 16-1 大曲農
六郷 7-5 大曲

【順位】①秋田和洋女②六郷③大曲農④大曲

関東

▽……埼玉県

▼男子1回戦
春日部 11-10 聖望
浦和工 17-11 草加
秩父 16-7 浦和南
川口工 15-9 大宮

▽同準々決勝
朝霞 18-5 春日部
川口工 20-9 大宮北
浦和市立 11-5 浦和工
坂戸 33-8 秩父

▽同準決勝
朝霞 14-7 川口工
坂戸 11-5 浦和市立

▽同決勝
坂戸 19-13 朝霞

▼女子予選リーグA組
深谷女 16-3 朝霞
浦和南 ― 聖望
深谷女 7-5 浦和南
朝霞 8-4 聖望
浦和南 12-5 朝霞
深谷女 18-10 聖望

▽同B組
川口女 10-6 浦和市立
熊谷商 17-4 浦和市立
熊谷商 9-5 川口女

▽同決勝トーナメント1回戦
浦和南 6-5 熊谷商
深谷女 19-2 川口女

▽同決勝
深谷女 6-1 浦和南

▽……茨城県

▼男子1回戦
土浦一 29-8 江戸崎
潮来 20-10 下館一
水海道一 31-9 鉾田一
土浦三 21-11 真壁
波崎 13(分)13 勝田工
抽せんで波崎高の勝ち

▽同2回戦
水戸一 20-8 茨城
麻生 21-11 土浦一
竜ケ崎一 17-11 磯原

石岡商 15−10 常北
土浦工 21−12 潮来
石岡一 21−14 水海道一
笠間 15−9 土浦三
水戸工 13−10 勝田工
▽同準々決勝
竜ヶ崎一 12−10 石岡一
麻生 16−9 土浦工
石岡商 14−5 水戸工
笠間 9−7 水戸一
▽同準決勝
笠間 24−7 石岡商
麻生 14−10 竜ヶ崎一
▽同決勝
麻生 26−13 笠間
▼女子1回戦
麻生 11−3 常北
石岡商 9−5 磯原
鉾田二 19−3 岩井
日立二 15−6 水戸二
石岡二 16−1 太田二
▽同準々決勝
八郷 12−2 鉾田二
水海道二 5−2 石岡商
石岡二 7−5 日立二
笠間 7−4 麻生
▽同準決勝
水海道二 13−5 笠間
八郷 9−2 石岡二
▽同決勝
八郷 6−2 水海道二

▽……山梨県

▼男子1回戦
塩山商 17−2 吉田
甲府南 14−4 谷村
都留 15−7 大月
園芸 23−8 甲府一
日川 不戦勝 東洋三
長坂 13−1 韮崎
韮崎工 11−10 甲府商
甲府工 14−7 機山
▽同準々決勝
塩山商 28−0 甲府南
園芸 21−12 都留
日川 21−4 長坂
甲府工 23−9 韮崎工
▽同準決勝
塩山商 18−6 園芸
日川 16−8 甲府工
▽同決勝
塩山商 11−4 日川
▼女子1回戦（3試合）
塩山商 9−7 第一商
山梨 9−3 園芸
甲府二 11−6 甲府商
▽同準決勝
日川 11−3 塩山商
山梨 14−5 甲府二
▽同決勝
山梨 5−4 日川

東海

▽……岐阜県

▼男子予選トーナメント1回戦（1試合）
岐阜東 9−3 大垣
▽同2回戦
益田 11−6 岐阜西工
東濃実業 30−7 岐阜北
多治見北 10−6 大垣南
加納 28−2 大垣農
不破 18−10 岐阜商
斐太実 15−8 大垣北
岐阜南 21−2 岐阜東
岐山 20−2 斐太
▽同3回戦
益田 23−5 東農実業
加納 15−8 多治見北
斐太実 17−12 不破
岐山 14−6 岐阜南
▽同決勝リーグ
加納 9−7 益田
岐山 17−6 韮太実
斐太実 12−9 益田
岐山 7−2 加納
加納 21−13 韮太実
岐山 10−8 益田
【順位】①岐山②加納③韮太実④益田
▼女子予選トーナメント1回戦
岐阜商 5−2 養老女商
加納 15−3 大垣北
鶯谷 7−0 韮太
大垣 7−6 岐阜南
▽同2回戦
大垣南 8−5 岐阜商
加納 4−2 高山
本巣 8−2 鶯谷
益田 17−4 大垣
▽同決勝リーグ
大垣南 6−2 加納
益田 5（分）5 本巣
本巣 3−2 大垣南
益田 5（分）5 加納
益田 9−2 大垣南
加納 2（分）2 本巣
【順位】①**益田**1勝2分（得19、失12）②本巣1勝2分（得10、失9）③大垣南④加納

▽……三重県

▼男子1回戦（3試合）
津工 10−0 亀山
津 32−6 海星
四日市商 19−15 高田
▽同準決勝
四日市工 23−6 津工
四日市商 11−8 津
▽同決勝
四日市工 14−4 四日市商
▼女子1回戦（2試合）
メリノール 4−1 白山
菰野 8−5 津
▽同準々決勝
津女子 12−0 メリノール
四日市商 13−9 松阪女
暁 23−0 菰野
四日市 15−4 上野商
▽同準決勝
津女子 10−4 四日市商
暁 13−2 四日市
▽同決勝
津女子 5−3 暁

近畿

▽……京都府

▼男子1回戦
平安 11−10 伏見工
洛東 22−7 日吉丘
塔南 17−0 同志社
嵯峨野 16−14 洛北
洛星 13−6 鴨沂
城南 19−6 西京商
大谷 15−11 田辺
乙訓 24−6 堀川
▽同準々決勝
平安 23−12 洛東
嵯峨野 13−6 塔南
洛星 20−9 城南
乙訓 16−11 大谷
▽同準決勝
平安 12−11 嵯峨野
洛星 16−6 乙訓
▽同決勝
洛星 11−7 平安
▼女子1回戦（2試合）
精華女 19−10 洛東
塔南 13−2 鴨沂
▽同準々決勝
精華女 13−11 乙訓
嵯峨野 5−4 桃山
明徳商 11−6 京都女
西京商 6−1 塔南
▽同準決勝
精華女 11−6 嵯峨野
西京商 7−5 明徳商
▽同決勝
精華女 9−7 西京商

▽……兵庫県

▼男子1回戦
御影工 17－8 西宮東
竜野 19－10 市神工
明石商 15－12 鈴蘭台
県兵庫工 26－3 有馬
尼崎工 19－15 村野工
三田 30－6 市神港
県神戸商 21－9 甲陽

▽同2回戦
明石 14－10 御影工
尼崎工 12－7 柏原
武庫工 21－14 三田
県神戸商 20－6 東播工
小野工 7－6 県兵庫
滝川 30－7 竜野
明石商 18－11 報徳
県兵庫工 22－9 明石南

▽同準々決勝
明石 16－10 小野工
武庫工 17－13 明石商
滝川 28－7 尼崎工
県兵庫工 11－6 県神戸商

▽同準決勝
滝川 14－12 明石
県兵庫工 13－12 武庫工

▽同決勝
滝川 17－14 県兵庫工

▼女子1回戦
西宮東 7－0 飾磨
夙川 10－3 県兵庫工
明石商 15－6 佐用
須磨女 5－4 明石
県尼崎 8－3 明石南

▽同準々決勝
甲子園学院 7－0 西宮東
鈴蘭台 9－3 須磨女
夙川 17－4 県尼崎
県神戸商 13－5 明石商

▽同準決勝
甲子園学院 18－5 鈴蘭台
夙川 10－9 県神戸商

▽同決勝
甲子園学院 6－4 夙川

中国

▽……広島県

▼男子1回戦
修道 21－7 広島電機
三津田 13－11 呉港
広 11－10 尾道
宮原 16－14 山陽
呉商 17－3 城北
松本商 17－13 盈進

▽同準々決勝
呉工 20－6 修道
広 16－4 三津田
宮原 14－5 呉商
三原工 18－6 松本商

▽同準決勝
呉工 9－7 広
三原工 22－11 宮原

▽同決勝
三原工 21－1 呉工

▼女子1回戦（準々決勝）
山陽女 6－2 進徳
呉商 6－1 宮原
豊栄 8－6 戸手商
広島一女 不戦勝 賀茂

▽同準決勝
山陽女 14－2 呉商
広島一女 9－2 豊栄

▽同決勝
広島一女 6－1 山陽女

◇関東つづき ▽……東京都

▼男子決勝リーグ
中大附属 19－6 国立
神代 15－4 四谷商
明星 20－6 鷲宮
中大附属 10－4 明星
鷲宮 9－8 四谷商
神代 9－2 国立
中大附属 18－6 四谷商
国立 4（分）4 明星
神代 12－9 鷲宮
中大附属 8（分）8 神代
鷲宮 15－11 国立
明星 18－5 四谷商
中大附属 30－10 鷲宮
国立 8－6 四谷商
神代 16－8 明星

【順位】①中大附属4勝1分（得85失34）②神代4勝1分（得60失31）③明星④鷲宮⑤国立⑥四谷商

▼女子決勝リーグ
桜水商 4－2 菊華女
小平 7－4 佼成学園
江戸川 5（分）5 園芸
菊華女 8－3 佼成学園
桜水商 14－3 園芸
小平 11－4 江戸川
小平 6－3 桜水商
菊華女 14－1 園芸
佼成学園 11－7 江戸川
桜水商 4（分）4 佼成学園
菊華女 9－5 江戸川
小平 15－3 園芸
桜水商 16－2 江戸川
小平 7－3 菊華女
佼成学園 12－4 園芸

【順位】①小平②桜水商③菊華女④佼成学園⑤江戸川⑥園芸

朝鮮大附高の来日内定

第2回日韓高校交歓スポーツ競技会は8月17、18、19日の3日間東京・駒沢オリンピック運動公園の諸施設を使って7競技が行われるが、ハンドボールは8月18日午後17時から全日本高校選手権東京都第一代表となった中大附属高が、19日午後14時からは同選手権優勝校（8月7日に決定）が駒沢体育館で対戦する。

韓国代表は朝鮮大附属高に内定同校は昨年訪韓した下関中央工が対戦し18－16で勝っているが日体大に同行した田中全日本学連理事長は7月17日全州で朝鮮大附属高の試合を観戦『恵れた体格でスケールの大きいプレーを見せ、日本チームは苦しめられそうだ』とその実力を買っている。

ブロック高校選手権

全日本高校選手権のトライアル（前哨戦）──各地の高校選手権は6・7月に7大会が開かれた。

室蘭商が6連勝 女子
─第20回北海道高校─

6月28、29日登別高で各地区予選を勝ち抜いた男子9、女子8校が参加して行われた。

男女とも決勝ラウンドには順当な顔ぶれが進み、男子では函館東が安定した改守を示して2年連続5度目の優勝、女子は予選リーグ全勝の室蘭商と室蘭東の室蘭勢によって決勝が争われたが、室蘭商が前半から優位に立ち、後半も鮮やかな攻撃で加点、快勝した、6年連続6度目の優勝である。（予選リーグの試合記録は本誌28頁「全日本高校選手権各県予選記録・北海道」の項参照）

▽男子決勝リーグ

函館東 14（5－1、9－4）5 函館大谷

北見工 15（7－5、8－5）10 函館大谷

函館東 15（5－3、10－3）6 北見工

【順位】①函館東②北見工③函館大谷

▽女子決勝

室蘭商 12（5－2、7－2）4 室蘭東

小杉、接戦で氷見降す
─第5回北信越高校─

6月21、22日福井県・羽水高校に北信越5県の代表男子10、女子10校が参加して開かれた。

男子は、2連勝をめざす小杉（富山）が、準決勝で地元・羽水（福井）と大接戦を演じ、引き分けから抽せん勝ちで進み、その幸運を決勝でも活かして、4点の負担を後半一気にはねのけて逆転勝ちし優勝した。富山代表の優勝は2年連続3度目。

女子は小松市女（石川）─小諸商（長野）の決勝となり、前半は互角の戦況だったが、後半に入ると小松市女の攻守がさえ快勝、初優勝を飾った。石川代表の優勝は初めて。

▽男子1回戦（2試合）

上田（長野）23－7 金沢泉丘（石川）、柏崎工（新潟）11－10 若狭（福井）

▽同準々決勝

小杉（富山）18－10 上田

羽水（福井）13－8 柏崎（新潟）

氷見（富山）19－9 金沢工大附（石川）

柏崎工 17－15 坂城（長野）

▽同準決勝

小杉 16（－、－）16 羽水

抽せんで小杉高の勝ち

氷見 14（－、－）9 柏崎工

▽同決勝

小杉 16（6－10、10－5）15 氷見

▽女子1回戦（2試合）

北佐久農（長野）9－6 若狭（福井）

福井商（福井）6－4 羽咋（石川）

▽同準々決勝

小松市女（石川）12－6 北佐久農

小杉（富山）7－6 柏崎常盤（新潟）

高岡女（富山）10－2 巻（新潟）

小諸商（長野）9－6 福井商

▽同準決勝

小松市女 9（3－1、6－2）3 小杉

小諸商 9（4－3、5－5）8 高岡女

▽同決勝

小松市女 11（4－4、7－0）4 小諸商

清水商と名女商
─第16回東海高校─

6月28、29日三重県・四日市工に東海4県の予選勝者男女各8校が集まり行われた。

トップゾーンにふさわしく男女とも好試合がつづいたが男子は清水商（静岡）が2連勝、女子は名女商（愛知）が2年ぶりの優勝を決めた。

男子は新しい力の抬頭がめだったが、名門・清水商がたくましい攻守でタイトルを守った。

女子はほとんどの試合が後半に勝負をかける激戦を演じ暁（三重）が静岡城北（静岡）を降す波乱などもあってもつれたが、愛知勢が粘りのあるチームプレーで決勝を争い名女商が栄冠を握った。

▽男子1回戦

静岡農（静岡）18（12－3、6－5）8 四日市工（三重）

豊橋商（愛知）13（7－4、6－6）10 加納（岐阜）

清水商（静岡）18（12－3、6－7）10 中京（愛知）

岐山（岐阜）18（8－1、10－3）4 四日市商（三重）

▽同準決勝

豊橋商 20（11－3、9－6）9 静岡農

清水商 10（5－3、5－3）6 岐山

▽同3位決定戦

岐山 15（7－2、8－5）7 静岡農

▽同決勝

清水商 19（10－4、9－7）11 豊橋商

▽女子1回戦

名古屋女商（愛知）8（2－1、6－2）3 二俣（静岡）

本巣（岐阜）6（5－3、1－1）4 津女子（三重）

高蔵女（愛知）11（6－4、5－2）6 益田（岐阜）

暁（三重）10（4－4、6－5）9 静岡城北（静岡）

▽同準決勝

名古屋女商 6（3－2、3－1）3 本巣

高蔵女 11（7－3、4－3）6 暁

▽同決勝

名古屋女商 9（5－2、4－0）2 高蔵女

▽同3位決定戦

本巣 8（5－2、3－3）5 暁

関東などは次号詳報

なお7月末に行われた第15回関東高校、第12回近畿高校、第19回四国高校、第19回九州高校などは次号に詳報いたします。第22回東北高校は9月16日から仙台市で開催の予定。

表彰式など記念行事

全国高体連ハンドボール部では創立20周年を記念して8月1日午後4時から富岡高校体育館で記念式典を開き功労者への表彰などを行う。このほか1日午後6時から富岡高校同窓会館で祝賀会を催すほか、7月31日から8月7日まで富岡高校で球界資料などの展示会を開くことになっている。

各地の記録

三菱レ大竹、6回目の栄冠

第14回中国選手権（男子のみ）は6月21、22日の両日岡山県津山市営グランドに中国5県の代表16チームが参加して行われた。

ベスト・フォアには実業団3、クラブチーム1が勝ち残り三菱レ大竹と初優勝を狙う日新製鋼呉の広島勢によって決勝が争はれた。

前半は接戦となったが、後半三菱レ大竹は巧みな試合運びで日新製鋼呉の反撃をおさえ制勝、2年連続6回目の優勝を飾った。

▽1回戦

三菱レ大竹（広島） 18（10−8、8−9）17 徳山ク（山口）

全倉敷（岡山） 20（12−4、8−7）11 日本鋼管（広島）

境港市役所（鳥取） 27（14−4、13−1）5 関西ク（岡山）

近畿大呉工学部（広島） 28（14−4、14−10）14 松江球友会（島根）

全広島商大（広島） 34（16−3、18−7）10 津山工専（岡山）

下関ク（山口） 26（10−6、16−7）13 岡山教員（岡山）

岡山大（岡山） 24（12−7、12−6）13 米子ク（鳥取）

日新製鋼呉（広島） 19（5−8、12−9、1−0、1−0）17 山口教員（山口）

▽同準々決勝

三菱レ大竹 28（11−11、17−6）17 全倉敷

境港市役所 13（7−6、6−2）8 近畿大呉工学部

下関ク 20（9−5、11−4）9 全広島商大

日新製鋼呉 31（14−5、17−14）19 岡山大

▽同準決勝

三菱レ大竹 22（13−1、9−6）7 境港市役所

日新製鋼呉 12（6−4、6−4）8 下関ク

▽同決勝

三菱レ大竹 17（7−5、10−7）12 日新製鋼呉

順天堂大が優勝

▼第15回千葉県春季総合選手権（6月・佐原市）

▽男子準々決勝

千葉教員 16−5 千葉工大A

順天堂大 21−6 千葉工大B

千葉商大 16−9 住友千葉化学

西武ク 19−10 木更津補給所

▽同準決勝

順天堂大 12−10 千葉教員

千葉商大 10−8 西武ク

▽同決勝

順天堂大 21（11−5、10−5）10 千葉商大

▽女子決勝

昭和学院高 8（4−3、4−2）5 佐原女高

武田薬品光の好調つづく

▼第6回会長杯争奪山口県実業団トーナメント（6月・下松市民体育館）

▽1回戦（3試合）

陸上自衛隊 18−15 三井石油

東洋ソーダ 24−21 山陽パルプ

出光徳山 28−18 日本ゼオン

▽準決勝

武田薬品光 29−20 陸上自衛隊

出光徳山 22−20 東洋ソーダ

▽同決勝

武田薬品光 18（11−5、7−11）16 出光徳山

仙台大、県制は遂げる

▼第13回宮城県総合選手権（6月 東北学院高）

▽男子準決勝

東北学院大 28−9 塩釜高OB

仙台大 28−11 古川工OB

東北大 21−10 宮城教大

東北学院大OB 15−10 宮城教員団

▽同準決勝

東北大 17−14 東北学院大

仙台大 12−8 東北学院大OB

▽同決勝

仙台大 19（9−4、10−7）11 東北大

▽女子1回戦（3試合）

全涌谷 15−3 祇園寺高

涌谷高 7−6 古川商高

宮二女高 6−4 宮三女高

▽同準決勝

全涌谷 10−9 古川女高

宮二女高 6−3 古川商高

▽同決勝

宮二女高 7（5−2、2−2）4 全涌谷

鵜の森クが勝つ

▼三重県クラブ対抗トーナメント

▽男子準決勝

鵜ノ森ク 20−11 修球会

高田高ク 15−9 四商ク

▽同決勝

鵜ノ森ク 23（12−4、11−5）9 高田ク

OB大会で金山体育館にお別れ

……愛知協会

第3回小杉杯争奪30才以上愛知OB大会は7月13日名古屋の金山体育館で開かれ、愛知教員クが昨年につづき優勝した。2位は名大ク、3位愛工ク。

会場の金山体育館はこの大会を最後に市民ホールへ改修されることになっており、これがお別れ試合。同体育館は昭和25年に開館、室内ハンドボールが盛んになってからは愛知協会のホームコートとして対ステラ（フランス）、対中国学生の国際試合を始め第3回全日本室内、学生東西対抗など多くの大会が行われ、特に近年は競技別利用度のうちハンドボールが最上位を占めるほどなじみが深く〝ハンドボール王国愛知〟のひとつのささえでもあった。

★各地の記録欄への寄稿を歓迎いたします。市大会以上の公式記録を大会終了後2週間以内にお送り下さい。なお、原文を短かくする場合があります。

編集後記

インターハイ、総合、教職員と大きな大会が三つ続きます。

ジメジメした梅雨もやっとあけ、カッと太陽の照りつける暑い夏がやってきました。

ハンドボール関係者が東に西に走り、大会から大会に駆けまわるシーズンです。

今年はいろいろ忙しい日々が続きます。

今号は二つの遠征、いずれもまず好成績といって良い成績を残して帰国した選手団の試合記録を中心にしてまとめました。

次号は夏の諸大会とこれら選手団の帰朝談を中心にまとめるつもりです。

頂点強化、この大目的のために現在ハンドボール界は進んでいます。そのための技術・戦術面での一筋の光明は見えています。一筋といってもかなり大きなものですあとは財政、情報収集その他の問題が残されています。残念ながら世界選手権基金運動の実施は延期になりました。より一層この趣旨を理解し、何とかこれを成功させたいものです。今号行なった紙上討論の「クラブ問題」これも何とか解決していかなければならないものです。課題はいろいろ山積しています。一人一人が努力していかなければ解決できません（TF）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第六十七号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可
昭和四十四年七月二十五日印刷 昭和四十四年八月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三二一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円
(年間購読 11回・千二百円)